

平成30年度
徳島で暮らす外国人のための日本語副教材

ごっついいんじょ!
とくしまのお宝 たから 大集合 だい しゅう ごう



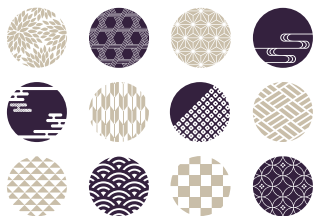
徳島県

TOKUSHIMA PREFECTURAL INTERNATIONAL EXCHANGE ASSOCIATION

企画製作：公益
財団
法人 徳島県国際交流協会

目次

徳島の宝「阿波おどり」	1
日常生活の中の阿波おどり	4
「お遍路」四国八十八箇所巡り	9
道のマンホールアート	11
「かかしの里」名頃に行ってみませんか？	15
「ごみゼロの町」「葉っぱの町」上勝町	16
「地震大国 日本」地震から命を守る準備をしましょう！	19
徳島のゆるキャラ *イメージキャラクター	22
やさしい日本語での落語	30
ときうどん	31
チリトテチン	32
徳島のむかし話	
阿波のタヌキ合戦	33~34
縦組の文章のため右頁(34頁)よりお読みください。	
ゆめつげ地蔵	35
米はき観音	36
仙人のおしえ	37~38
縦組の文章のため右頁(38頁)よりお読みください。	
訳 (英語・中国語・ベトナム語)	



とくしま たから 徳島の宝 「阿波おどり」

とくしま 徳島といえば「阿波おどり」。あわ おどりには、ねん い じょう れきし 400年以上の歴史があります。いま では、にほん 日本をはじめ、せかい 世界に誇るとくしま 徳島のでんとうげいのう 伝統芸能のひと 一つです。

まいとし 毎年8月のなか ごろ、お盆の時期に、とくしま 徳島県内のいたるところであわ おどりが行われます。いちばんおおい 一番大きなあわ おどりは、がつ にち 8月12日から15日のよっ か かんひら 4日間開かれるとくしま 徳島市のあわ おどりで、まいとし 毎年100万人をこえるひと が、ぜんこく 全国から、そしてせかい 世界からとくしま 徳島にきます。

さいきん 最近では、なつ い がい 夏以外にも、いろいろなイベントとコラボしているので、いちねんじゅう あ わ 一年中阿波おどりをたの 楽しむことができます。

● あわ おどりのれん 連

あわ おどりをおど るグループを「れん 連」と言います。「れん 連」の数は1000を超えていて、かいしゃ や だいがく 会社や大学、だんたい などで作られています。そのなか 中でも、じゆくれん 熟練したおど りをする「れん 連」を「ゆうめいれん 有名連」と言います。



いっしょにあわ おどりをおど ってみたい方は、TOPIAのグループ「あそ われん 連」に参加してみませんか。

まいとし 毎年8月14日に「争いの無い世界」をねが おど っています。

せ ひ いっしょにおど ってください。(申し込みは7月頃です)

もし、とうじつ 当日、さん か 参加したいときは、よやく なしでおど る「にわかれん 連」があります。

むりょう (無料)

● おどりの種類

踊りには、男踊りと女踊りの2つがあります。どちらも踊りの基本は、右手と右足、左手と左足をいっしょに出して踊ることです。

男踊りは、腰を低くして、力強く踊ったり、軽快に、または躍動的に踊ったりします。男性だけでなく女性や子どもも踊ることが多いです。

一方、女踊りは、編み笠をかぶり、下駄をはき、腕を高く上げて踊ります。全員がそろって踊る姿は、とても美しいです。



男おどり



女おどり



● 鳴り物 (楽器)

阿波おどりの鳴り物には、鉦、鼓、締太鼓、大太鼓、太鼓、横笛、三味線があります。それらが、阿波おどりの二拍子の軽快で陽気なリズムを作ります。それを「ぞめき」と言います。さあ、ぞめきにあわせて踊りましょう。



かね しめだいこ
鉦・締太鼓



おおだいこ
大太鼓



よこぶえ
横笛



shamisen
三味線

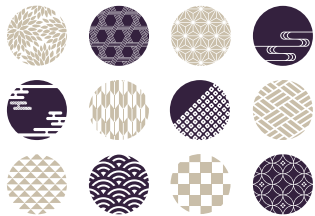


“踊る阿呆にみる阿呆、同じ阿呆なら踊らにゃ損々!”。

これは「見るより、踊ったほうが楽しいですよ」という意味です。

「ヤットサ〜! ヤット、ヤット!」のかけ声にあわせて、阿波おどりと徳島の素晴らしい夏を楽しんでください。

(写真は全てあわそわ連)



にちじょうせいかつ なか あわ
日常生活の中の阿波おどり

徳島では、生活のいつでも、どこでも、いろんなところで「阿波おどり」を近くに感じることができます。

これは、徳島の空の入り口「徳島阿波おどり空港」です。この名前を聞いてびっくりする人が多いかもしれませんね。

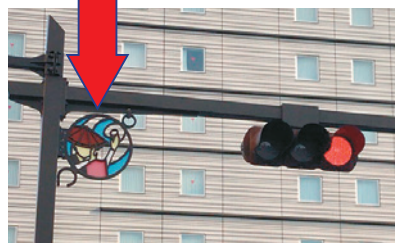
とくしまあわ くうこう
徳島阿波おどり空港



徳島の町を歩いていると、いろんな所で阿波おどりのデザインを見ます。
 さあ、いっしょに見ていきましょう！

まず、JR徳島駅の前では「郵便ポスト」や信号の柱、歩道に阿波おどりのデザインを見つけることができます。

とくしまえき
JR徳島駅



しんまちがわ あいばはまこうえん かべ あわ え か
 新町川の藍場浜公園のトイレの壁には阿波おどりの絵が描いてあります。

あいばはまこうえん
 藍場浜公園



さき しんまちばし りょうごくばし
 その先の新町橋や 両国橋では、さらにたくさんの阿波おどりのデザインを見つけることができます。

しんまちばし
 新町橋



りょうごくばし
 両国橋





みなさんは、徳島市の眉山の下にある「阿波おどり会館」に行ったことがありますか？

ここでは、いつも、阿波おどりの公演をしています。その会館の前には、編み笠の形をした休憩所などもあります。

阿波おどり会館



編み笠の形の休憩所

紺屋町にはガイドブックにもものっている「阿波おどりからくり時計」があります。

朝の10時から夜の8時まで、2時間おきに阿波おどり人形が阿波おどりのリズム（ぞめき）にあわせて、踊ります。

午後6時と8時は特別で、7色のLED照明によって阿波おどりの影絵がはっきり見えます。ぜひ、一度見てください。

紺屋町



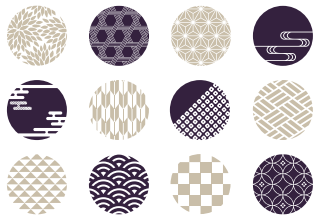
徳島市の中心部だけでも、こんなにたくさんの阿波おどりのデザインがあるんですね。ぜひ、地図を見ながら、一度歩いてみてください。デザインがいくつ見つけれられるでしょうか？

また、皆さんの住んでいる町でも思ってもいない所に阿波おどりのデザインがあるかもしれませんね。ぜひ、捜してみてください。

(TOPIA 中国語情報誌阿波生活250号参照)

徳島中心部





へんろ しこくはちじゅうはっかしょめぐ 「お遍路」 四国八十八箇所巡り

お遍路とは、今から約1200年前に、仏教のひとつの宗派「真言宗」の僧侶「弘法大師」(空海)が修行の場所としていた「四国八十八箇所の霊場・お寺」をお参りするということです。

今では、宗教の垣根を越えて、たくさんの方が、日本全国から、そして世界からこのお寺巡りをするために来ます。その目的は、「自分探しの旅」であったり、「疲れをとって癒やしを求める旅」であったり、健康や、恋愛、結婚、これからの夢の実現を願うなどさまざまです。

その八十八箇所の一番はじめのお寺(一番札所)「霊山寺」が、なんと、この鳴門市大麻町にあるのです。

一番のお寺から順番にお遍路をすることを「順打ち」と言い、徳島県の後には高知県、愛媛県、そして香川県の順に1400kmを約50日かけて歩きます。このごろでは、たくさんの方が、車やバスで、何回にも分けて回ることが多いです。

なお、八十八番から一番に向かって歩くことを「逆打ち」と言い、願い事が「順打ち」の3倍叶うと言われてしています。

和歌山県にある総本山(高野山)にある「奥の院」では、今でも弘法大師様が修行をされている、と言われています。ですから、88のお寺を巡った後は、「結願」といってお参りする人が多いです。

今、四国4県で、この四国八十八箇所霊場と遍路道を「世界遺産」に登録しようという活動もおこなわれています。

納経帳…お寺をお参りした後、お経を書いてもらいます。



いちばんだしよ
一番札所



にばんだしよ
二番札所

お接待

お遍路をしていると、道行く人や、地元の人が、親切にしてくれたり、飲み物や食べ物をくれたり、「頑張ってください」とか「お疲れ様です」と声をかけてくれます。このように、物質的にも精神的にもサポートしてくれるのが「お接待」です。

同行二人

お遍路をする人が被っている笠をみると「同行二人」と書かれています。お遍路では、自分一人で歩いている、いつも「弘法大師」がいっしょにいて守ってくれている、という考えです。



一番札所 霊山寺



お遍路さん



金剛杖は弘法大師の分身といわれ大切にされます。



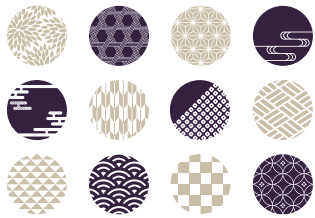
さんばんだしよ 三番札所



よんばんだしよ 四番札所



ごばんだしよ 五番札所



みち 道のマンホールアート



皆さん、この写真は何だと思えますか。道にある「マンホール」の蓋です。
今、おしゃれな「マンホールアート」が日本でも、そして海外でもブームにな
ってきています。

マンホールの蓋には、その町のみんが知っている場所や食べ物、花などがデ
ザインされ、「ご当地マンホール」とも言われています。みんなが知っているア
ニメの主人公などが描かれていることもあります。

さて、徳島のマンホールの蓋にはどのようなものがあるのでしょうか？

なるとし
鳴門市



なるとし
鳴門市にあるマンホールです。有名な
「大鳴門橋」と「うず潮」が描かれてい
ます。

みぎ
右は鳴門の名物、「鯛」と「梨」もデザ
インされています。



うずしお おおなるときょう
渦潮・大鳴門橋



なるとだい
鳴門鯛



なし
梨



よしの がわし かもしま ちょう
吉野川市鴨島 町



きく はな
菊の花

きくにんぎょう ゆうめい かもしまちょう
菊人形 で有名な鴨島 町の
マンホールです。「菊の花」が
デザインされています。毎年、
10月終わりごろから11月終わ
りごろまで、吉野川市役所前
のイベントひろばや、JR鴨島
駅前で「菊人形・菊花展」が
あります。



きくにんぎょう
菊人形

よしの がわし かわしま ちょう
吉野川市川島 町



かわしまちょう
川島 町のマンホールです。

ひだり かわしま かわしまじょう
左は川島のシンボル「川島 城」
が描かれています。右には、川島 城
のほかに、「高越山」や「あゆ釣り」、
「潜水橋」も描かれています。



かわしまじょう
川島城



こうつさん
高越山



せんすいきょう
潜水橋

かいぶくんにみなみちよう
海部郡美波町



ウミガメの産卵地として有名な海部郡美波町のマンホールです。ウミガメがデザインされています。

おおはまかいがんに、毎年5月から8月にアカウミガメが産卵に来ます。また、ウミガメ博物館「カレッタ」では、たくさんのウミガメをみることもできます。



アカウミガメ



おおはまかいがんに
大浜海岸



はくぶつかんに
ウミガメ博物館「カレッタ」



また、道にはマンホールのほかにも、いろいろな蓋があります。

みまぐんわさまち
美馬郡脇町

これらには、うだつの町並みの「壁」のようすが描かれています。



しきりべん
仕切弁



しょうかせん
消火栓



うだつの町並み

うだつがあがらない

「うだつ」とは、となりの家との間に取り付けた防火壁（火事の時、となりの家の火が移ってこないようにするための壁）です。お金がかかるため、お金持ちしか作ることができなかったことから、「うだつがあがらない」ということばができました。

これは、「いつまでたっても、出世しない」、「地位や生活が良くなかないこと」です。



うだつ

鳴門市



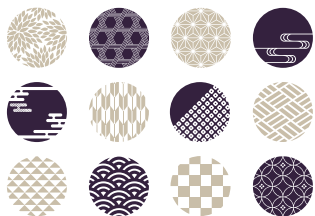
これは、鳴門の消火栓です。はしご車の絵が描かれています。子どもが喜びそうですね。



徳島のマンホールはいかがでしたか？ 皆さんが、その町のことを知らなくても、マンホールの絵からその町の有名なものを知ることができますね。どれも、それぞれおもしろく、見るだけでとても楽しいです。このようなマンホールは、皆さんの国でもありますか？ 今まで道の上の蓋の芸術を見ていない人、まずは今日の帰り道、明日のお出かけの時、ちょっと道を見てください。楽しい発見があるかもしれません。

* 「マンホールアート」で検索したら、日本全国のいろんなデザインのマンホールをたくさん見ることができます！ ぜひ、検索してみてください。

(TOPIA 中国語情報誌阿波生活261号参照)



「かかしの里」名頃に行ってみませんか？



皆さん、「かかし」を知っていますか？

もともと、かかしは、人に似せて作った人形のことで、鳥から米などの作物を守るために田んぼや畑の中に置くものです。

皆さんの国にも「かかし」はありますか？ もしあるなら、それは、どのようなものですか？

そんな「かかし」が「人よりも多い」場所が徳島県にはあります。

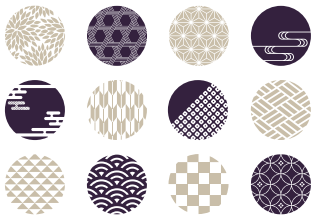
その村に住んでいる人は30人もいません。しかし、人間そっくりの「かかし」が、村中に約180体もあることから「かかしの里」と呼ばれています。

これらのかかしは、地元の女性が一人で作っています。かかしを作り始めて14年、今までに約400体のかかしを作ったそうです。

なぜ、こんなに有名になったかという点、2014年にかかしの里を訪れたドイツ人留学生が、ビデオ配信をしたからです。今では、50万回も再生され、世界中からたくさんの観光客が来ているのです。

ぜひ、皆さんも行ってみてください。人とまちがえて、かかしにあいさつをするかもしれませんね。





「ごみゼロの町」^{まち}「葉っぱの町」^は上勝町^{まち} ^{かみかつ} ^{ちょう}



やま かこ 山に囲まれた上勝町。
かみかつちょう たなだ うつく 棚田が美しい



こげ ゆうめい やまいぬだけ 苔で有名な「山犬嶽」

ごみゼロの町^{まち}

とくしまし くるま じかんはん い おくぶか やま なか かみかつちょう としよ はんぶん し じんこうやく
徳島市から車で1時間半ほど行った奥深い山の中にある「上勝町」。お年寄りが半分を占める人口約
にん まち いま せかい かんしん も
1600人の町が、今、世界から関心を持たれています。

なぜなら2003年^{ねん}に「町^{まち}から出るごみを2020年^{ねん}までにゼロにする」という宣言^{せんげん}をして、取り組^とんでい^くるから
です。

いま みな す ばしょ はんしゅるい わ す 3 しゅるい 5 しゅるい
今、皆さんが住んでいる場所では、何種類にゴミを分けて捨てていますか？ 3種類？ 5種類？ では、
みな くに わ す くに おお
皆さんの国ではどうですか？ 分けずに捨てる国も多いかもしれませんね。

しかし、この上勝町^{かみかつちょう}では、13品目^{ひんもく}、45種類^{しゅるい}に分別^{ぶんべつ}してゴミを集めて^{あつ}います。さらに、びっくりすることは、
その80%以上^{いじょう}がリサイクルされていることです。

かみかつ ちやう せんげん
上勝町 ゼロ・ウェイスト（ごみゼロ）宣言

みらい こども きれいな くうき やおいしい みず ゆた だいち う ねん かみかつちやう
未来の子供たちに、きれいな空気やおいしい水、豊かな大地を受けつぐため、2020年までに上勝町
のゴミをゼロにすることを決め、上勝町 ごみゼロ（ゼロ・ウェイスト）を宣言します。

- 1) ちきゅう よご さない ひと づくりに つと めます！
地球を汚さない人づくりに努めます！
- 2) ごみの さいりよう ・ さいしげん 化をすすめ、2020年までに しょうきやく (= や いて す てること) ・ う め 立て 処分
をなくすいちばん良い努力をします！
- 3) ちきゅうかんきやう をよくするため せかいぜんたい にたくさん の 仲間をつくれます！
地球環境をよくするため世界全体にたくさんの仲間をつくれます！

このような どりく めが ぜんこく から、そして せかい から かんしん をも 持たれ、まいとしやく 2500 人がこの町のゴミの どりく め
を見学に来ているのです。



ゴミステーション



かいがい けんしゅう グループのけんがく ようす
海外の研修グループの見学の様子



リサイクルショップ

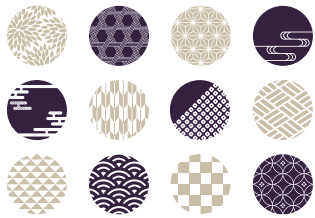
は 葉っぱの町

海外から日本を訪れるたくさんの皆さんが、和食を食べる時に、びっくりして感心するのが、「和食の美しさ」です。お皿の料理のまわりに、季節ごとの葉っぱや花が添えられていますね。それらを「つまもの」と言いますが、その「葉っぱ」を30年も前からビジネスにしている町が、この「上勝町」なのです。約1600人のこの町で約160軒もの農家のお年寄りが、パソコンや携帯電話で注文を受けて、山や野原で葉っぱを採って出荷しているのです。

「もみじ」や「いちょう」など1年間で300をこえる種類の葉っぱが、日本全国の料理店で使われています。徳島の上勝の葉っぱが、たくさんの人の目をひきつけます。和食のおいしさを引き立たせてくれているのです。

徳島の美しい町「上勝町」。輝いていますね！





「地震大国 日本」

地震から命を守る準備をしましょう！



今、世界のいろいろなところで、大きな地震や津波が起きたり、火山が噴火したりしています。



津波から避難



火山噴火

ここ日本でも、大きな津波がたくさんの家や町を壊した
2011年の「東日本大震災」の後、大きな地震や、小さな地震が、
何回もおこっています。

このように、日本は地震がとても多い国なので「地震大国」と言われています。

地震の大きさを表すマグニチュード9.1、地震による揺れの大きさを示す震度7クラスの「南海トラフ
巨大地震」が徳島県で起こる可能性は、これから30年の間に、70%から80%と言われています。

徳島県で、もし、このようなとても大きい地震が起こったら、たくさんの建物が壊れたり、海が近いところでは津波が来ます。津波は川を通ってくるので、海から10数km離れている場所でも安心はできません。また、山が崩れたり、道が割れたり、火事が起こることもあります。

地震は、いつ、どこで起きるかわかりません。また、津波があなたの所にも来るかもしれません。地震や津波が起こった時、どこに逃げたらいいか、調べておいてください。また、地震のために日ごろから準備をしておいてください。

地震の時の避難のマーク

ひじょうぐち 非常口	こういきひなんばしょ 広域避難場所	きんきゅうひなんじょ 緊急避難所
		
建物のなかから逃げる時、迷った らこのマークの所から逃げる	地震が起こった時、急いで逃げ る広い場所	地震から逃げた人が、危険が なくなるまで生活する所

つなみ
津波のマーク



つなみ とき とお たか ところ に
津波の時は遠くよりも、高い所に逃げよう！

つなみちゆうい 津波注意	つなみ ひなんばしょ 津波避難場所	つなみ ひなん 津波避難ビル
		
つなみ く 津波が来るかもしれない場所	つなみ とき に 逃げる たか ばしょ 津波の時に逃げる高い場所	つなみ とき に 逃げる たか 津波の時に逃げる高いビル

じゅん び
準備

- ①家具やテレビなどが倒れないように、金具や突っ張り棒で固定しておいてください。
- ②地震の時に、すぐに持ち出せる食べ物や水、生活用品を3日分用意しておいてください。
- ③地震のあと、1週間、暮らせる食べ物や水、そして生活用品を用意しておいてください。



かなぐ
金具



つ ば ぼう
突っ張り棒



せいかつようひん
生活用品



ひなんじょせいかつ
避難所生活

- ④地震・津波の時に逃げて行く場所や、そこまでの行き方を調べておいてください。
- ⑤緊急の連絡先（大使館や家族の連絡先）やパスポート番号などをメモしておいてください。

地震が来たら

- ①まず、頭や体を守ってください。(机の下に隠れる。家具や窓、電灯などから離れる)
- ②アパートやマンション、ビルの中に入ったら、エレベーターは使わないでください。
- ③もしエレベーターの中に入ったら、すべての階のボタンを押して、止まった階ですぐに降りてください。
- ④海や川が近いところは津波が来るかもしれません。膝の高さの波でも流されてしまいます。
徳島市内では5m、徳島県南部では10m前後の津波が来る場所もあります。特に海に近いところにいる人は、すぐに山や3階以上に逃げてください。
- ⑤逃げる時は車で逃げないでください。道路が混雑したら、まったく動けなくなります。
- ⑥停電(電気が一時的に来ない)になったら、家を離れるときは、必ずブレーカーを切ってください。電気が使えるようになった時、火事になることが多いです。



詳しい事は、TOPIA ホームページの左側の「注目情報」の欄に「防災ハンドブック」があります。
必ず読んでください。



ブレーカーを切る



皆さんは、ゆるキャラを知っていますか？ 今、日本全国には、それぞれの地域を応援するイメージキャラクターがたくさんいます。熊本県の「くまモン」や愛媛県の「バリィさん」などはよく知られていますね。ここ徳島にもたくさんのゆるキャラ（イメージキャラクター）がいますので、皆さんに紹介します。それぞれのキャラクターには、地域の特徴（有名な場所や、食べ物など）があります。また、イメージキャラクターを見ると、その町のことを知ることもできます。ここでは、その地域のほかの情報も紹介します。一緒に見ていきましょう！

トッピー (TOPPY / 多宝)

TOPIA

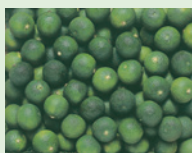
徳島県国際交流協会 (TOPIA) は1990年に設立しました。その10周年を記念して、2000年にTOPIAのマスコットキャラクター、トッピーは生まれました。トッピーにはたくさんの徳島の名所や名産が描かれています。そして、トッピーは、大きなアンテナで世界中から情報を集め、地球が平和であることを願っています。



あわあい ちきゅうぎ
阿波藍&地球儀



なると うずしお
鳴門の渦潮&アンテナ



すだち



やまもも



なると きんとき
鳴門金時

トクシィ

徳島市

2012年に誕生した明るく元気な魚の妖精「トクシィ」。徳島市の良いところを全国にPRすることや、元気で楽しい町にするお手伝いをしています！阿波おどりと、おしゃべりが大好きな女の子です。



トクシィ



あいばはまこうえん
藍場浜公園



とくしまマルシェ



ひょうたん島クルーズ



びざん
眉山

うずしおくん&うずひめちゃん

鳴門市

「うずしおくん」は、市ができてから50年を記念して1996年に生まれました。その後、「うずひめちゃん」は2012年、「うずしおくん」のパートナーとして誕生。鳴門市をもっと元気にするために、いろいろなところで活動しています。

うずしおくん (右)

服：鳴門の美しい海の青色に、渦潮の「うず」をデザイン

頭：大鳴門橋

マントとNARUTOの文字の黄色：市の花「ハマボウ」の黄色

うずひめちゃん (左)

帽子と服の色：鳴門金時をイメージ。服には「うず」のマーク



©鳴門市



ハマボウ



なると うずしお
鳴門の渦潮



おおなると きょう
大鳴門橋



なると きんとき
鳴門金時 (さつまいも)



なると だい
鳴門鯛

こまポン

こまつまし 小松島市

こまつまし みんな あわ たぬき がっせん きんちょう
小松島は、民話「阿波の狸合戦」の金長だぬきのふるさとです。そして、有名な強い侍（源
よしつね おお たたか とき
義経）が大きな戦いの時に、この小松島にやってきたと伝えられています。

その金長だぬきと侍（源義経）をイメージして、強そうで、かわいい金長だぬき「こまポン」
が生まれました。小松島の良いところやおいしいものをPRするためにがんばります！



せいべつ
性別：おとこのこ

たんじょうび がつついたち し ひ
誕生日：6月1日（市ができた日）

せいかく なかよ こうきしん
性格：みんなと仲良くできるのんびりやさん。でも好奇心いっぱい！！

とくぎ ね ね
特技：たぬき寝いり（寝たふりをするこ）



たけちくわ



すだち



こまつまし
小松島ステーションパーク

あななん

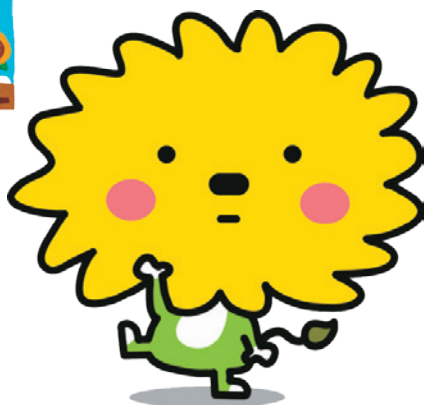
あなんし 阿南市

あなん しこく もっと ひがし まち
阿南は、四国で最も東にある町です。だから、四国で一番初めに太陽が昇るのを見ることができます。

あななんは「光のまち阿南」に咲くひまわりから生まれた、花と光のたてがみを持ったライオンの
ような不思議なキャラクターです。

たくさん しぜん ひかり ひとびと つく だ あたら ひかり
沢山の自然の光と、人々が創り出す新しい光のエネルギーをたっぷり

あ げんき そだ
浴びて、元気にのびのび育っています。



たんじょうび へいせい ねん がつ にち
誕生日：平成25年10月12日

ねんれい さい
年齢：5歳

せいかく き げんき
性格：やる気と元気がいっぱい

とくぎ しあわ
特技：みんなを幸せにすること

あたら ひかり ひかり
*新しい光：LEDの光



LEDドーム



たいりゅうじ
太龍寺



しこく いちばん ひがし かもだみさき
四国の一番東：蒲生田岬

ヨッピー&ピッピー

よしのがわし 吉野川市

「四国三郎」と呼ばれる吉野川の中流域南岸にある吉野川市は、美しいオンツツジやホタル、また、「甘々娘」というとうもろこしや美郷の梅酒で有名です。2003年吉野川から生まれた水の精「ヨッピー・ピッピー」は、吉野川遊園地で活動していました。今は、二人力を合わせて吉野川市の観光地や特産品のPRを頑張っています。



ヨッピー (左)

男の子 いたずら好き

ピッピー (右)

女の子 しっかり者

二人のチャームポイント：かわいらしい口元

吉野川の中流域南岸：23ページ地図 ★星じるしを見てください。



なつかしい吉野川遊園地
(2011年閉園)



オンツツジ
(船窪つつじ公園)



ほたる
(美郷)



甘々娘
(とうもろこし)

ちょぞっ娘

かつうら ちょう 勝浦 町

勝浦町の貯蔵みかんPRキャラクターとして生まれた13歳の女の子です。かわいいアニメのキャラクターのような大きな目とビタミンカラー（野菜やくだものの色）で統一された姿がチャームポイントです。



特技：阿波おどり



有名なビッグひな祭り



私たち TOPIA も
応援しています



貯蔵みかん

ふじっこちゃん

いしい ちょう 石井 町

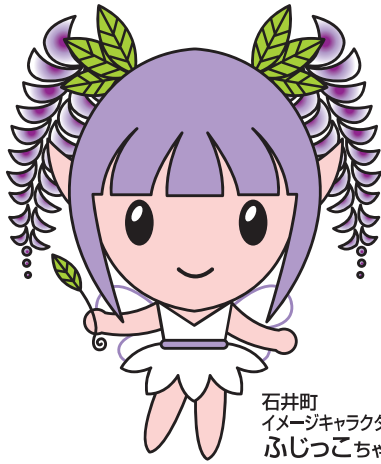
「ふじっこちゃん」は石井 町の花である藤から生まれた妖精です。藤の花をかたどった髪の毛と、どこにでも飛んでいける羽が特徴です。誰からも親しまれ、愛される石井 町のキャラクターとして、いろんな所でがんばっています。

性格：少しのんびり屋だけど人なつっこく、誰とでもすぐ友達になれる

特技：花づくり

好きな食べ物：なんば（とうもろこし）

好きな場所：花と緑がたくさんあるところ
（特に藤とイチヨウが大好き）



石井町
イメージキャラクター
ふじっこちゃん



ふじ
藤



じふくじ ふじ
地福寺の藤



てんじん
天神のいちよう

ゆずばあちゃん

なか ちょう 那賀 町

木頭は、ゆずが有名です。ゆずばあちゃんは、人々がゆずを採る時の香りから生まれた妖精です。ゆずの妖精、四国山脈の山あいの村で活躍中です。ゆず畑でがんばる元気なおばあちゃん、いつも「いけるいける」（大丈夫大丈夫）と言っています。

好きな食べ物：「かきませ」と「はんごろし」



ゆずばあちゃん 那賀町許諾No. 14



かきませ（ゆずのお寿司）



はんごろし（おはぎ）



ゆず



「日本ードローンが飛ぶ町」を
目指しています

ふるるん

かいよう ちょう 海陽 町

かいふがわ ふる
海部川の風流マラソンの「風流 (ふる)」からイメージされた「ふるるん」はかいふがわ ようせい
海部川の妖精です。
ねん がつ にち たい かい
2009年2月22日 (第1回マラソン大会開催日)に生まれました。かいよう ちょう かいふがわ ふる
海陽町と海部川風流マラソンのことをぜんこく かた し
全国の方に知ってもらうことが、ゆめ
てんしんらんまん こ
天真爛漫 (子どものように明るくて元気)な「ふるるん」です。



シーカヤック



ダイビング



サーフィン



かいふがわ ふる
海部川風流マラソン



かいふがわ
海部川

まつしげ かり ちょう 松茂 係 長

まつしげ ちょう 松茂 町

つき げかい ちきゅう かんさつ
月から下界 (地球) を観察しているうちにまつしげ ちょう む ちゅう
松茂町に夢中になってしまった月のうさぎです。
まつしげ ちょう
松茂町をととても愛しているので町のたくさんのとくさんひん
特産品をからだにつけています。のんびりしたせいかく
性格で、好きな乗り物は、なんといっても「ひこうき」
飛行機です。しゅみは、つ まつしげ とくさん つか つく りょう
趣味は、釣りや松茂の特産を使って作る料理です。



まつしげ ちょう
松茂町にある阿波おどり空港

あいのすけ

あいずみ ちょう 藍住 町

かわいい大きな目をしていて優しくてのんびりした人です。誰にでも楽しく話しかけてくれる、「阿波藍」の店の番頭（店長）さん。両手を前に合わせて丁寧にあいさつをする礼儀正しい性格です。子どもたちと、手をつないだり、じゃんけんをしたりして、遊ぶことも大好きです。彼の仕事は、藍住町の特産品である藍染めや、特産物の魅力を発信していくことです。

たんじょうび がつ にち
誕生日：4月29日

せいかく おだ みな よろこ だいす
性格：穏やかで皆さんを喜ばせることが大好き

しゅみ あいぞ あいずみちょう
趣味：藍染め、藍住町のにんじんを使った料理をすること。

じゃんけん



グー(石) チョキ(はさみ) パー(紙)



にんじん



あいやかた
藍の館



あいきもの
藍の着物

かきじい

かみいた ちょう 上板 町

かきじいは大きくて甘い柿の名産地の上板町大山で生まれ育ちました。静かに柿畑の世話をしてく暮らしていましたが、自分のふるさと上板町を全国にPRすることになりました。おじいさんですが、まだまだ元気に活躍しています。

ねんれい さい
年齢：150歳

しゅみ けしき なが
趣味：きれいな景色を眺めながらのウォーキング

チャーミングポイント：きれいな白いひげ、小さい目

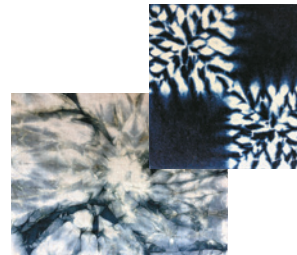
ふく かみいた ちょう でんとうさんぎょう あい しぼ ぞ
服：上板町の伝統産業「藍」の絞り染め



©上板町



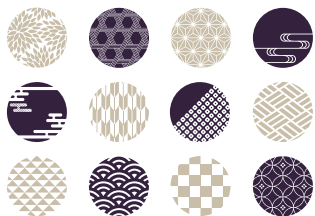
かき
柿



あい しぼ ぞ
藍の絞り染め



もも
桃



にほんご らくご やさしい日本語での落語

上方落語家

桂七福



らくご 落語とは

やく ねんまえ えどじだい う にほん てんどうけいのう ひと
約400年前（江戸時代）に生まれた、日本の伝統芸能の一つです。

ひとり ひと ひと こえ はな はなし
一人の人がいろいろな人になって、声をかえて話しながらおもしろい話をします。

せんす てぬぐ つか うご きも あらわ
扇子と手拭いを使って、いろいろな動きや気持ちを表します。



ときうどん

2017年8月20日 TOPIA 開催
桂 七福氏 やさしい日本語での落語会より

【出てくる人】 うどん屋・客・男

ある夜、1人の男がうどんの屋台を呼び止めて、うどんを注文しました。この客は「匂いがいい」「味がいい」などと言って、うどん屋をたくさんほめました。うどん屋はとてもいい気分になりました。うどんの値段は16文です。お客はうどんを食べ終わると、お金をひとつずつうどん屋に渡します。「1つ、2つ、3つ、4つ、5つ、6つ、7つ、8つ…」そして、お客はうどん屋に時間をたずねました。うどん屋は「9つ」と答えました。お客は「10、11、12…」と続けて、15文しか払いませんでした。

この様子を見ていた男がいました。この男は「自分も同じことをしてみよう!」と思いました。次の日、うどんの屋台を見つけて、うどんを注文しました。でも、うどんは全然おいしくなくて、このお客はうどん屋をほめることはできませんでした。うどんの値段は16文です。お客はうどんを食べ終わると、お金をひとつずつうどん屋に渡します。「1つ、2つ、3つ、4つ、5つ、6つ、7つ、8つ…」そして、お客はうどん屋に時間をたずねました。うどん屋は「5つ」と答えました。お客は「6つ、7つ、8つ…」と続けて、19文払いました。

扇子を使ってうどんをおいしそうに食べる様子



チリトテチン

2018年8月25日 TOPIA 開催
桂 七福氏 やさしい日本語での落語会より

【出てくる人】 旦那・近所の梅さん・近所の竹さん

ある日、梅さんが旦那の家に来ました。旦那は梅さんに料理を出しました。梅さんは料理を食べて、「お腹いっぱいです。本当に幸せです」と言いました。梅さんは旦那が出した料理をいつも「おいしい、おいしい」と言って食べます。

竹さんが旦那の家に来たときも、旦那は料理を出します。でも、竹さんはいつも「おいしくない」とか「これは知っている」とか、嫌なことを言います。旦那は梅さんに竹さんのことを話しました。

その日、旦那の家に、腐って小さくなった豆腐がありました。豆腐は黄色くなって、青や赤のカビが生えていました。旦那は腐った豆腐にしょうゆとわさびを入れて混ぜました。そして、それを箱に入れて、「長崎名物チリトテチン」と書いた紙を貼りました。

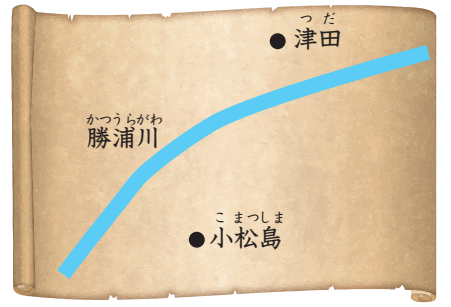
梅さんが竹さんを旦那の家に呼んで来ました。旦那は竹さんに「長崎名物チリトテチンを知っているか？食べてみるか？」とたずねました。竹さんは「もちろん知っています。大好きです。食べます」と答えました。

「チリトテチン」は臭くてまずいです。でも、竹さんは我慢して食べました。旦那は竹さんに「チリトテチンはどんな味だ？」と聞きました。

竹さんは「うーん、豆腐の腐ったような味です」と答えました。

腐った豆腐とは知らず食べる様子





けんめい走って逃げましたが、勝浦川まで来て、それ以上逃げる事ができなくなりました。後ろは川です。そのとき、大鷹が「すみません、どうぞ、逃げてください！」と言って、金長を勝浦川へ突き飛ばしました。大鷹は金長ができるだけ遠くへ泳いで逃げられました。

るように一人でいっしょうけんめい戦いましたが、殺されてしまいました。金長は大鷹のおかげで、なんとか小松島に無事逃げる事ができました。

突然、帰ってきた金長の話聞いて、大鷹の息子や兄弟をはじめ大勢のタヌキたちが、かたき討ちのために集まってきました。

そのころ、穴観音城では鹿の子姫が、父である六右衛門になんどもなんども泣きながら頼んでいました。

「タヌキ同士が戦ってはいけません。津田でも小松島でもたくさんタヌキが死んでしまいます。どうか、やめてください。」

しかし、六右衛門は娘の言うことを聞きませんでした。それで、鹿の子姫は父親と好きな人が戦うことになってしまったのを悲しんで高い崖から飛び降りて死んでしまいました。六右衛門は

「娘が死んだのは金長のせいだ。金長を今すぐ殺せ！」と言うと、す

べての仲間のタヌキを勝浦川に集めました。

こうして「阿波のタヌキ合戦」と呼ばれる戦いが始まりました。

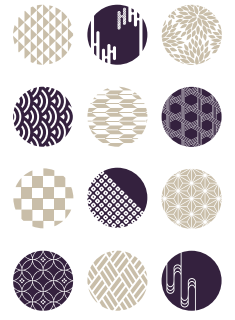
津田にも小松島にも六百匹ずつのタヌキが集まりました。この戦いは三日間も続きました。金長は最後に、鹿の子姫が死んだ津田の崖に六右衛門を追い詰めました。そこで、金長は六右衛門との戦いに勝ち六右衛門を倒しました。

金長はけがをした体で小松島に何とか帰ってきました。そして、「大和屋」の茂右衛門のところへ行き、今までのお礼を言うと、その場で力尽きて死んでしまいました。

茂右衛門は金長の生き方はすばらしいと強く思い、「正一位金長大明神」と名前を付けました。神様となった金長のために神社を建て、食べ物や贈り物を供えました。

日峰山のふもとにある金長神社には、今でも多くの人が訪ねて、手を合わせています。





徳島のむかし話

「阿波のタヌキ合戦」小松島市

今から百五十年くらい前、徳島県が阿波の国と呼ばれていたころ、日開野（徳島県小松島市）に「大和屋」という藍（草の名前）を使って色や模様を布に付けてそれを売っている大きな店がありました。

ある日、その店の主人の茂右衛門が歩いていると、子供たちが大きな木の穴にいるタヌキをいじめていました。

「何をしているんだ、かわいいそうだろう。逃がしてやれ。」と言って、タヌキを助きました。

茂右衛門が助けたタヌキは金長という名前で、優しい主人がいる大和屋に住みつくことにしました。その後、金長は大和屋の守り神になり、お客さんがたくさん来るようになりました。

ある晩、金長が寝ていると神様が現れて、「もっと強くなるために旅をきなさい。」と言いました。大和屋の主人、茂右衛門は「守り神さんに出ていかれては困ります。旅に行かないでください。」と頼みまし

たが、金長はまた帰ってきて守り神になるからと約束して出かけてしまいました。

その後、金長は大鷹というタヌキといっしょに、津田山（徳島市の穴観音城）にいる四国で一番強いタヌキの六右衛門のところに行きました。六右衛門は、金長と大鷹のことを「小松島から来たのか。がんばれよ。」と喜んで迎えました。それから、二人はいっしょけんめい学び、どんどん強くなっていききました。

六右衛門には鹿の子姫という娘がいました。鹿の子姫は金長が好きでした。六右衛門は強くなった金長のことが気に入っていたので、娘と結婚して、自分の息子になるように言いました。ところが、金長は「とてもありがたいのですが、小松島に帰り大和屋の守り神になると約束しているの、あなたの息子になることができませぬ。すみませぬ。」と丁寧に断りました。

六右衛門は「こんないい話を断るのは、小松島に帰り、仲間のタヌキを集めて、穴観音城に攻めてくるつもりかもしれない。」と思い、仲間タヌキに「金長をつかまえろ！」と命令しました。金長と大鷹は小松島へ向かっていっしょ



「ゆめつげ地蔵」 板野郡北島町

むかし、南古田村（板野郡北島町）であったお話です。

その村はみんな田んぼでお米を作っていました。しかし、近くに吉野川という四国で一番大きな川が流れていて、大雨が降るたびに、水があふれるので困っていました。村の人たちは、とても高い土手（川の岸に土で作った高い壁のこと）を作りました。そして

「どうか、大雨が降ってもこの土手が壊れせんように守ってください。」と土手の上にお地藏さん（苦しみから人々を守ってくれる神様）を立てました。

ある日、夕方から雨が降りだしました。村のみんなは、

「これくらいの雨だったら、大丈夫だ。」と米作りで疲れていたのでぐっすり寝てしまいました。しかし、夜中になって、雨は激しくなり、大雨になりました。すると、やがてどこからか、

「川の土手が壊れるぞー。早く逃げろー」と大きな声がありました。あまりにも大きな声なのでみんなはびっくりしてとび起きました。川のほうを見ると川の水が土手の高さいっばいまで来ていました。

「これはたいへんだ。早くにげろー」村人はあわてて逃げました。村の人が、どうにか高い場所にある光蓮寺に着いたとき

「土手が壊れたぞー。」とまた大きな声が聞こえてきました。

するとどっと水が、吉野川からあふれてきて、花をつけたばかりの田んぼの稲やたくさんの家が押し流されていきました。そのとき、ひとりの若者が土手まで泳いでいき、お地藏さんを背中に背負って寺へ戻ってきました。自分と同じ大きさの石のお地藏さんをこの大水が流れる中、背負ってきたのだから、みんなはびっくりしました。光蓮寺の和尚さんが若者に聞きました。

「どうして、お地藏さんを運んだのだ？」すると若者は、

「お地藏さんが夢に出てきて、土手が壊れるぞと教えてくれました。このままだとそんなお地藏さんが流されてしまう。」和尚さんは少し考えて、村人に聞きました。

「土手が壊れるぞ、そして土手が壊れたぞと言ったのは誰だ？」しかし、誰もいませんでした。

「そうか、お地藏さんだ。お地藏さんが私たちに教えてくれたんだ。」

村人はお地藏さんに心から感謝しました。

今では「ゆめつげ地蔵さん」と呼ばれて、大切に光蓮寺の庭に置かれています。そして、毎年、夏になるとお祭りが開かれています。



「米はき観音」徳島市助任本町

徳島が「阿波の国」と言われていたころのお話です。助任に弘誓寺と

いうお寺がありました。とても貧しく、寺を囲む塀はあちこち崩れていました。この寺のお坊さんは一日中、念仏だけを唱えて（お祈りをして）いました。しかし、念仏を唱えることにいっしょうけんめいだったので、お寺はますます貧しくなっていました。

ある日、小坊主（お寺でお坊さんになるために修業している人）がお坊さんに言いました。

「お坊さま、朝のお米がございません。どうしましょうか。」

「米が無くなったら、芋があります。芋が無くなったら、何も食べないで念仏を唱えなさい。」このお坊さんの返事を聞いて、仕方なくお寺のお金になりそうなものを全て売ってお米を買いました。そんなわけで、たくさんいたお寺の小坊主たちはいなくなり、欲張りな小坊主が一人だけになってしまいました。その小坊主が、

「もう、残っているのはお坊さんが毎日拝んで（祈って）いらっしやる観音様だけです。それを売りましょう。」と言うと、お坊さんは

「何という罰当たりなことを言うのだ。何も考えずに拝めば、道が見えてくるものだ。お前も拝みなさい。」と怒りました。

小坊主は「バカみたいだ。拜んでお米が食べられるなら誰も苦労はし

ない。」と心の中で思いながら、念仏を唱えました。

「なむあみだぶ、なみあむだぶ…」としばらく拜んでいると変な音が聞こえてきました。

ザア、ザア、ザア、パラ、パラ、パラ、パラ…見ると目の前の観音様が米を口からはきだしていたのです。きらきら光るお米は、たっぷり二人分ありました。これがうわさになり、たくさんの人が見にくるようになりました。お賽銭（お参りした時にお供えするお金）が増えて少しお寺も楽になってきました。ところが、欲張りな小坊主はもっと観音様がお米をはいてくれたら儲けることができると考えました。

ある日、いつものように観音様がお米をはき始めると小坊主は観音様の口に熱くなった真つ赤な火箸（炭火を扱う金属のお箸）を入れて、口を大きくしようと思いました。

「さあ、もっと口を開ける。もっとたくさん米をはくんだ。」

しかし、その後、観音様は米をはかなくなりました。そして弘誓寺は元の貧しい寺に戻ってしまいました。小坊主は、その後、寺を追い出されたとか、観音様の罰を受けて死んだとか言われています。誰もこの小坊主がどうなったかは知りません。



まれたことを聞くことにしました。

仙人は、長者の娘には若い男を婿(おつと)に迎えればすぐに良くなる。農家のミカンの木の根元には千両箱(お金)がたくさん入った箱)が埋まっているので、掘りだしたら金の毒がなくなるので実がなる。大きな蛇の頭に石の球が入っている。それを取れば願い通りになると教えてくれました。息子は何度も仙人にお礼を言って、すぐに山を下りました。



まず蛇に教えると蛇はしっぽの先の刀で頭のこぶを割って取ってくれと息子に頼みました。息子が刀で切るとこぶが割れ、そのこぶの中に手を入れると中に白い球が入っていました。蛇は崖から息子を下ろすと刀と白い球をくれました。大きな蛇は天から下りてきた黒い雲に乗って天にのぼっていききました。

次は、農家の主人にミカンの木の根元を掘るように言いました。次の日、ミカンの木の根元を掘ると千両箱が三箱出てきました。農家の主人はとても喜んで一箱、お礼にくれました。

最後に息子は村の長者さまの家に行きました。

「娘さんの病気は、娘さんが初めて会った若い男を婿にすると治ります。」と伝えました。すると隣の部屋で寝ていた娘が戸を開けてお礼を

言いました。

「私のことでほんとうにお世話になりました。」と言うと息子と顔を見合わせました。そして驚いたことに、とても元気になって歩けるようになりしました。長者さまはその様子を見てとても喜びました。

「娘が初めて見た若者はあなたです。病気も治ったので、うちの婿になつてくれないか。」しかし、息子は

「そんなことをしたら、目が見えない母に申しわけない。母の願いをかなえてやれなかったのです。」と言って帰って行きました。

「お母さん、山に行くときに、三人に頼む事をお母さんの目のことは仙人に頼めなかったんだ。本当にごめんなさい。もう一度、山に行つて仙人に頼んでくるからもう少し待っていてください。」と謝りました。そして、今回の旅のことを話しながら、

「これが大きな蛇がくれた石の球で、これが刀だよ。」と母に触らせました。すると驚いたことに、すぐに母の目がぱちりと開いたのです。母と息子は抱き合つて喜びました。それから、息子は長者さまの家の婿になり、みんな長生きして幸せに暮らしました。



「仙人のおしえ」 三好市西祖谷山村

*仙人—人間の世界から離れて山の中に住み、いつまでも年をとらず、死なない特別の力を持った人

むかし、むかし、目の見えない母と親孝行の息子が住んでいました。息子は毎日わらじ（稲を編んで作る靴）を作り、それを売って母の好きなものを買っていました。そんな息子に、母は申し訳ないと思っていました。ある晩、夢で、神様が息子に言いました。

「山に仙人がいる。そこに行ってお母さんの目を治してくださいと頼むのだ。」息子は毎日、神様にお願ひしてよかったですと喜びました。

次の日の朝、息子はお弁当をたくさん持って家を出ました。すこし歩くと長者さま（村で一番のお金持ちのお年寄り）に会いました。

「こんなに朝早く、どこへ行くのかな？」と息子に尋ねました。

「母の目を治してもらったため山の仙人に会いに行くところです。」と息子が答えると

「それはいい。私の娘が三年も病気で寝ているんだが、どうしたらいいか仙人に聞いてくれないか。」と長者さまは言いました。

「はい、分かりました。」と息子は返事をして、また山に向かって歩き出しました。

夕方になり、農家に泊めてもらいました。その農家の主人に行き先を

聞かれ、仙人に会いに行くこと息子が答えると

「それはちよūdい。うちの三本のミカンの木に三年間、一つも実がならないんだ。どうしたらいいか仙人に聞いてくれないか。」と頼まれました。わかったと返事をして、息子は次の日の朝早く出かけました。いくつもの山や谷を越えて進むと、登れそうもない高い崖の下にきました。困って崖を見上げていると大きな蛇が、どこへ行くのかと聞いてきました。仙人のところに行くこと息子が答えると

「それはちよūdい。わたしが崖の上へ上げてやろう。わたしは川や山で千年も修行してきたが、どうしても天にのぼれないんだ。どうしたらいいか、仙人に聞いてくれないか。」と蛇が言いました。わかったと息子が約束すると崖の上から長いしっぽが下りてきました。それにかまると崖の上へぶうんとはね上げてくれました。それから、いくつもの山や谷を越えてやっと仙人の家に着きました。

「私は、山のももどで暮らしている者ですが、聞きたいことがあって参りました。どうか、教えてください。」

と息子が頼むと仙人は

「教えてもいいが、三つしか教えてやれないよ。」と言いました。

息子は考えました。頼みたいことは四つありましたが、先にみんなから頼



Tokushima's Treasure: Awa Odori

Tokushima is well known for its Awa Odori (Awa Dance). This dance holds an over 400-year history. It is one of Tokushima's traditional arts that is famous domestically and abroad.

Awa Odori Dance festivals are held throughout the prefecture during the month of August. The largest festival is held in Tokushima City for four days from August 12 to August 15. Every year, over a million people visit from all over Japan and the world. In recent years, people are able to enjoy Awa Odori before and after summer at various collaborative events.

●Awa Odori "Ren" (Dance Group)

A group that dances Awa Odori is called a ren. There are over 1,000 ren, which includes companies, universities, and organizations that form a group. Groups that train extensively throughout the year are called Yuumei-ren (Famous Group)



If you would like to dance, join TOPIA's very own Arasowa-ren! We dance every year on August 14 with a hope for a world that does not fight. Let's dance together! (Application period starts around July). For those who would like to dance on the day of, there is also the Niwaka-ren which you can join for free without prior reservations.

●Dance Styles

There are two dance styles, the men's dance and the women's dance. Both dance styles have the same dance foundation of alternating the movement of the right arm and right leg, and left arm and left leg in and out.

In the men's dance, dancers lower their hips, and dance vigorously to the rhythm in a bouncing motion. The men's dance is not only comprised of men dancers, but also women and children dancers. On the other hand, the women dance with their arms raised high, and wear straw hats on their head and geta (Japanese traditional sandal) on their feet. Their synchronized movements are very elegant.

●Narimono (Instruments) and Zomeki (Rhythm)

The Narimono (instruments) used in Awa Odori include the gong, hand drum, shime-daiko drum, o-daiko drum, yokobue flute, and shamisen. These instruments are played to the distinct two-rhythm cheerful beat of the Awa Odori which is known as Zomeki (rhythm). Let's dance to the rhythm of the Awa Odori!



"The dancers are fools, the watchers are fools, we are all fools so let's just dance!" This means that it is more enjoyable to dance than it is to watch. Enjoy Tokushima's fascinating summer to the well-known cheers of "Yattosa! Yatto Yatto!"

Awa Odori in our Daily Lives

Here in Tokushima, our lives are surrounded by Awa Odori everywhere and all the time.

Tokushima Awa Odori Airport

Tokushima Awa Odori Airport acts as an entrance to Tokushima's skies. Many people are probably surprised when they hear Awa Odori incorporated in the airport's name.



When walking around Tokushima City, you will find many places that incorporate Awa Odori into their design. Let's take a look!

First, in front of JR Tokushima Station you will find Awa Odori on the post box, traffic light post, and on the sidewalk. Awa Odori is illustrated on the walls of the restroom at Aibahama Park near Shinmachi River. If you walk a little further, you will find the Shinmachi Bridge and Ryogoku Bridge where additional Awa Odori designs can be found.

Have you visited the Awa Odori Kaikan located at the bottom of Mt. Bizan in Tokushima City? You can watch performances of Awa Odori there every day. There is a rest stop made in the shape of the iconic straw hat in front of the museum.

The Awa Odori Karakuri (automaton) Clock Tower mentioned in many travel brochures sits in the center of Konyamachi. The dolls in the clock dance to the rhythm of the Awa Odori song every two hours between 10AM and 8PM. Between 6PM and 8PM, LED lights of seven different colors light up the clock, and the silhouette of the dancers can be seen. Be sure to make a stop at this clock!



Awa Odori inspired designs can be found all around Tokushima city center. Be sure to walk around the city while using this map. How many Awa Odori locations will you be able to spot? You may even be able to find these designs in your town in unexpected places. Be sure to have a look!

Shikoku 88 Temple Pilgrimage

The Shikoku 88 Temple Pilgrimage is a route that circles the 88 holy places and temples that Kobo Daishi (Kukai), a monk of Shingon Buddhism, conducted aesthetic training at these locations approximately 1,200 years ago.

Currently, people from all over Japan and the world with a variety of backgrounds come to take part in the pilgrimage. The purpose of their visit varies from taking a trip of self-discovery, travelling to seek rest and healing; and making prayers for good health, and success in love, marriage, and the future. The first temple (Ichiban fudasho) of the 88 Temple Pilgrimage, Ryozenji Temple, is located in Tokushima's Oasa Town located in Naruto City. Starting the pilgrimage at Temple No.1 is called Jun-uchi. After Tokushima, pilgrims will walk for about 50 days for 1,400km through Kochi, Ehime, and Kagawa. More recently people drive their car or take a bus to visit all the temples, or complete the pilgrimage in parts. Furthermore, completing the pilgrimage by starting at Temple No.88 and ending at Temple No.1 is called Gyaku-uchi. It is said that a person's prayers have a three times greater chance of being answered compared to completing the pilgrimage in Jun-uchi. It is said that Kobo Daishi is still in a state of enlightenment at the main temple atop Mt. Koya, Okuno-in Temple. Many people visit this temple after visiting all 88 temples to get their prayers answered, and this act is referred to as Kechi-gan.

There are currently efforts being made towards registering the 88 sacred temples and pilgrimage route as a UNESCO World Heritage Site.

Osettai (Hospitality)

The local people along the route of the pilgrimage share their kindness to pilgrims by offering food and drinks, and encouraging them with "You can do it!" "You're doing a great job!". Therefore, osettai offers physical and emotional support to pilgrims.

Dogyo Ninin

The characters 同行二人 (Dogyo Ninin) are written on the straw hats the pilgrims wear. These words are associated to the belief that even if you are walking alone, Kobo Daishi is with you and protecting you.

Tokushima's Manhole Art



What is featured in this picture? It's a cover of a manhole. The stylish manhole art has become popular in Japan and all over the world. Manhole covers are designed with motifs of famous attractions, foods, and flowers of the town. They are sometimes referred to as "Local Manhole Art". Sometimes the main characters of famous Anime series are drawn on these manholes. What type of manholes will you find in Tokushima?

Naruto City

This manhole is from Naruto City. The famous Onaruto Bridge and whirlpools can be seen on the cover. It is also designed with sea bream and pears which are specialty products of Naruto City.

Kamojima Town, Yoshinogawa City

This is the manhole of Kamojima Town, which is famous for its Chrysanthemum dolls. Kamojima's manhole is designed with chrysanthemum flowers. Chrysanthemums are displayed in the event courtyard of Yoshinogawa City Hall and in front of JR Kamojima Station every year from the end of October to the end of November.

Kawashima Town, Yoshinogawa City

Kawashima Castle, Kawashima's town symbol, is pictured on the Kawashima Town manhole. The manhole on the left depicts images of Mt. Kotsu, fishing for sweet fish, and Sensui Bridge (submerged during floods).

Minami Town, Kaifu County

This is the manhole for Minami Town, a place well-known for sea turtles to lay their eggs. Minami's manhole is decorated with sea turtles. Every year from May to August, the loggerhead turtles come to lay their eggs on the Ohama Coast. You can also

see many turtles at the Turtle Museum “Karetta”.



There are a variety of decorative covers on the street that can be found in addition to manholes.

Wakimachi, Mima County

These are designed with the illustration of the walls of the Udatsu Townscape.

Udatsu ga agaranai

An Udatsu is a fire resistant wall built between two houses to prevent fires from spreading from one house to another when a fire occurs. The phrase “Udatsu ga agaranai” derived from the fact that Udatsu are expensive and only the wealthy could afford it. This phrase means “Never being able to get ahead.”, “Unable to make any progress despite efforts”.

Naruto City Fire Hydrant

This is Naruto City’s fire hydrant. It has a picture of a fire engine on it. Children will be excited to see this in their neighborhood.



Did you enjoy looking at Tokushima’s manholes? Even if you have never been to a town, you can find out what is famous in the town just by looking at its manhole art. All of them have individualistic characteristics, making it fun to just look at. For those who have not seen street cover art, please be sure to take a look at the street on your way home today or when you go out tomorrow. You might make a fun little discovery!

*Look up “manhole art” and you’ll find ones from all over Japan.

Visiting Nagoro’s Village of Dolls

What is a kakashi? Originally they were scarecrow dolls made to look like humans and placed in the middle of fields and rice fields to protect the rice crop from birds. Do you have kakashi in your home country? If you do, what do they look like? Actually, there is a place in Tokushima where there are more kakashi than humans. (Nagoro Area, Higashi Iya, Miyoshi City: Located to the west of the Oku-Iya Vine Bridges). The village is called “Kakashi no Sato” (Village of Dolls) because this village of 30 people is home to 180 kakashi throughout the village that look very close to humans.

These kakashi are all made by one local woman. It has been 14 years since she started making kakashi and has made about 400 so far. It became famous because a German international student uploaded a video of the village in 2014. The video gained 500,000 views and many travelers from around the world visit the village. Be sure to visit if you have the chance. You might even mistake one of the dolls for a human and greet it by mistake!

Kamikatsu Town: Town of Zero-Waste and Leaves

- Kamikatsu town surrounded by mountains. Its terraced rice paddies are beautiful.
- Yamainudake is famous for moss.

Zero Waste Town

Kamikatsu Town is located in the depths of the mountains, 1.5 hours away from Tokushima city. Half of its population of 1,600 is made up of elderly and has been the recent center of attention. It is because in 2003, the town made a declaration and are making efforts to have zero waste from their town by 2020. How many categories is garbage separated into in your area? Three categories? Five categories? What about in your home country? There are probably many countries where rubbish is not separated. However, in Kamikatsu Town it is separated and gathered into 45 types, and 13 categories. The most surprising thing is that over 80% of garbage from the town is recycled.

Kamikatsu Town Zero Waste Declaration

In order to pass down clean air, pure water, and a rich nature to future generations, we resolve to reduce Kamikatsu’s garbage to zero, and declare Kamikatsu a “Zero Waste Town”.

- 1) We will do our best to raise people who will not pollute the earth!
- 2) We will make our best efforts to promote reuse and recycle of waste and rid of the practices of burning and burying trash.
- 3) We will work with our friends around the world to improve the environment of our earth!

This declaration has become known all over Japan and around the world. 2,500 people visit Kamikatsu every year to see the declaration in practice.

Town of Leaves

When visitors from Japan and abroad eat traditional Japanese cuisine, they are surprised and intrigued by its beauty. Seasonal leaves and flowers, called tsumamono, are embellished on plates around the main dish. Kamikatsu has made these leaves into a business since 30 years ago.




There are 160 blocks of elderly farmers who utilize computers and cell phones to take orders, then pick and send the leaves in this town of about 1,600 people. 300 different types of leaves, including Maple and Ginkgo leaves, are sent to restaurants throughout Japan all year long. The leaves of Tokushima’s Kamikatsu Town make people’s eyes light up, and brings out the delicious flavors of traditional Japanese cuisine. Tokushima’s beautiful town of Kamikatsu located in the mountains is shining in the spotlight!


Japan: Land of Earthquakes




Make Preparations to Protect Your Life from an Earthquake

In recent years, there have been large earthquakes, tsunamis, and volcanic eruptions. In Japan alone, numerous large earthquakes followed the 2011 Great East Japan Earthquake and smaller earthquakes occur occasionally. Due to these factors, Japan is often referred to as an “Earthquake-Prone Country” because of the frequency of earthquakes. It is said that there is a 70-80% chance of the The Great Nankai Trough Earthquake (Magnitude 9.1, Intensity 7) occurring in the next 30 years.

In the case that a major earthquake strikes Tokushima, about 75% of buildings would be damaged, and a tsunami would impact coastal areas. Even places located 10km away from the ocean are not considered safe, as tsunami waves can surge through rivers. There is also a possibility of landslides, broken roads, and fires. We don’t know when or where an earthquake will occur. Your neighborhood may even be affected by a tsunami. Find a place to evacuate to when an earthquake or tsunami hits. Start preparing for natural disasters today.

		
Run away to this sign when you are unsure where to escape the building.	A place that you can run away to immediately after an earthquake occurs.	A place where earthquake evacuees can live until danger subsides.

Tsunami Signs  When a tsunami comes, run away to a high place rather than someplace far away

		
A place that a tsunami may hit.	A high place to run to in the case of a tsunami.	A high building to run to escape a tsunami.

Preparation

- ① Stabilize furniture and television so that they do not fall.
- ② Prepare three-days’ worth of daily goods including water and food that can be found right away when an earthquake happens.
- ③ Prepare one weeks’ worth of water, food, and daily goods for after the earthquake.
- ④ Decide on a place to run to during an earthquake or tsunami, and an escape route.
- ⑤ Have a copy of emergency contacts (phone numbers of your embassy and family members) and your passport number.

When an earthquake comes...

- ① First, protect your head and body (Hide under a desk. Move away from furniture, windows, and lights)
- ② If you are in your apartment building, do not use the elevator. Use the stairs to escape.
- ③ If you are in the elevator, press all of the floor buttons and get off immediately at the next floor that the elevator stops at.
- ④ People who live near the ocean or rivers may experience a tsunami. You can be swept away even by knee length waves.

In Tokushima city, tsunami heights may reach 5m, and in Southern Tokushima, heights may reach approximately 10m. People living near the ocean should run away to the mountains or the third floor or higher of a building.

- ⑤ Do not use a car when escaping. You will be unable to move if traffic becomes congested.
- ⑥ Turn off your breaker before leaving the house during a power outage. Fires often occur when the electricity turns back on.



You can find out more about disaster prevention by visiting TOPIA's homepage, and clicking on the "Disaster-related Information" banner located on the left of the page.

Tokushima's Yuru-kyara* *Mascot Characters

Have you ever heard of a "yuru-kyara"? Japan has many mascot characters that support each local area. Kumamoto's Kumamon, and Ehime's Bary-san are just a few examples of Japan's "yuru-kyara". In this chapter, we will introduce the many mascot characters in Tokushima that represent famous local specialties (famous places, food, etc.). Each character has its own characteristics. People can learn a lot about a town just by looking at its mascot character. Additional information about specific areas can be found in the explanations below. Let's take a look at Tokushima's mascot characters!

TOPPY (TOPIA's mascot)

Tokushima Prefectural International Exchange Association (TOPIA) was established in 1990. As a way to commemorate its 10th anniversary, TOPIA's mascot TOPPY was born in 2000. TOPPY is made up of Tokushima's famous attractions and products. It gathers information with its antenna and wishes for world peace.

Sudachi-kun

Tokushima Prefecture's mascot is Sudachi-kun. This character acted as Tokushima's mascot at the 1993 East Shikoku National Sports Festival. Even now, Sudachi-kun travels around Japan to promote Tokushima. Furthermore, its dream is to tell the whole world about Tokushima. Sudachi-kun really likes making people happy and sprinkles vitamins, its energy source, with its charming smile.

Tokucy

In 2012, the bright and energetic fairy fish "Tokucy" was born. She promotes Tokushima City's attractions and is helping with making the town energetic and fun! Tokucy is a girl who loves Awa Odori and loves to chat.

Uzushio-kun and Uzuhime-chan

Uzushio-kun was born in 1996 to commemorate the 50th anniversary of Naruto City. Following this, Uzuhime-chan was born in 2012 to become Uzushio-kun's partner. These two characters are working in many places in order to make Naruto City more vibrant.

Komapon

Komatsushima is the hometown of Kincho Danuki (Tanuki), from "The Tanuki War of Awa". It is also said that the famous strong samurai Yoshitsune Minamoto started marching from Komatsushima before going to a mighty battle. A strong and cute Kincho Danuki "Komapon" was born by putting together the two images of Kincho Danuki and Yoshitsune Minamoto. He is working hard to promote the attractions and delicious foods of Komatsushima.

Ananan

Anan is the most Eastern town of Shikoku, making it the first place in all of Shikoku to see the sun rise. Ananan is a mysterious character that looks like a flower with a mane of light that was born from a sunflower in the shining town of Anan. It continues to grow with strength by being fully showered in natural light and new manmade energy.

Yoppi and Pippi

Yoshinogawa City, located at the midstream eastern cliff of the Yoshino River (referred to as the Shikoku Saburo), is famous for its beautiful Rhododendron weyrichii flower, fireflies, Kankan Musume Corn, and Misato plum liqueur. Yoppii and Pippi were born as a water spirit and originally represented the former Yoshinogawa Amusement Park. Currently they are working together to promote Yoshinogawa City's sightseeing spots and specialty products.

Chozokko

Chozokko is a 13-year-old girl who was born as Katsura Town's promotion character for Chozo mikan (Mandarin oranges stored in a warehouse for a couple of months in order to lessen its acidity and bring out its sweet taste). Her beautiful looks come from the combination of her large cute anime character like eyes and vitamin color (color of fruits and vegetables).

Fujikko-chan

Fujikko-chan is a fairy born from Ishii Town's flower, the Wisteria. Her special characteristics are the wisteria flowers in her hair and wings that fly her anywhere. She is loved by everyone, and is working hard as Ishii Town's beloved character.

Yuzu-baachan

Kito is famous for yuzu. Yuzu-baachan is a spirit that was born from the fragrance of freshly squeezed yuzu. This yuzu spirit is working hard in the Shikoku mountain range in a mountain village. She is an energetic grandma working hard in the yuzu fields that always says "Ikeru! Ikeru!" (It's okay! It's okay!).

Fururun

Fururun was imagined from the artistic representation of Kaifu River's Furu Marathon, and is a spirit of Kaifu River. It was born on February 22, 2009 during the first marathon. It is Fururun's dream that people across Japan will know about the Kaifu River's Furu Marathon.

Matsushige Kakaricho

Matsushige Kakaricho is a rabbit from the moon who fell in love with Matsushige Town when he was looking upon the earth. He loves Matsushige Town so much that he accessorizes with the town's local produce. Matsushige Kakaricho has a relaxed personality and all he talks about is airplanes. His hobbies include fishing and cooking with Matsushige's produce.

Ainosuke

Ainosuke is kind and laid back, and has large cute eyes. He is the owner of an indigo shop and enjoyably strikes up conversations with people. Ainosuke is polite and greets everyone with his two hands held in front of him. He loves playing with children by holding their hand, and playing rock paper scissors. Ainosuke's job is to promote Aizumi Town's indigo dye and charms of its local products.

Kaki-jii

Kaki-jii was born and raised in Oyama, Kamiita Town which is famous for its large and sweet persimmons. He used to work quietly in his persimmon field, but now promotes his hometown of Kamiita Town to all of Japan. Though Kaki-jii is an old man, he still cheerfully plays an active role in the town.

Rakugo in Easy to Understand Japanese

Born 400 years ago in the Edo Period, Rakugo is one of Japan's many performing arts. A storyteller tells comedic stories while playing roles of many characters by changing their voice. Actions and feelings are expressed by using a fan and a hand towel.

Tokiudon

【Characters】 Udon shop, customer, a man

One night, a man stops a vendor of a roadside *udon* noodle cart, and orders a bowl of *udon*. The customer is clearly so impressed with the food. "Mm....This possesses such a pleasing aroma." Or, "Oh, the soup tastes surprisingly deep and delicious." He gives a lot of smooth compliments. The vendor gets a great satisfaction from the pleasant words.

The price of the bowl of *udon* is 16-mon. When the man finishes eating, he starts to hand one-mon coins to the vendor in order, indicating rhythmically, "One...two...three...four...five...six...seven...eight...What time is it?" he asks. The vendor replies, "Nine." "...Ten....eleven....twelve...." he follows and wangles successfully, paying only 15-mon.

Another man has been watching all about shrewdly. "All right. I'll do that trick in likewise." the man plots. The next day, the shrewd watcher catches the cart and orders a bowl of *udon*. However, the *udon* tastes horrible actually, so he fails in any way to have a flattering tongue. Still, the *udon*'s price is 16-mon.

Anyway, the man finishes eating, and he starts to count, absolutely. Piling one-mon coins, "One....two....three....four....five....six....seven....eight...." Then he sure does...., "What time is it?" The vendor answers curtly, "Five...Six...seven...eight...." he proceeds and gives 19-mon.

Chiri Tote Chin

【Characters】 Danna(Sir), a wealthy man Ume, a neighbor Take, another neighbor

Ume-san shows up at Danna's house as usual. Ume always expects Danna(Sir) to treat him. When he eats he is always

glad and praise the food in an obvious way, like this, “Mm.....It tastes really good. This is so delicious! I’m so happy to have such a wonderful feast. ...yummy...”

Looking at Ume eating, Danna thinks of Take-san, another neighbor. In contrast, Take doesn’t appreciate his treat very much. He even gives nasty comments like, “This doesn’t taste very good,” or “I know this, you know, it’s very common.” “Don’t you have any other delicacy?”

That day, Danna finds some left over tofu in the cupboard. It has already gone horribly bad, was shrunk, covered with thick blue or red mold. He has got an idea that he would play a trick on Take with it.

Danna mashes the rotten tofu and, mixes with some soy sauce and wasabi. He puts it in a beautiful gift box that is nicely labeled. It says, “Specialty from Nagasaki, Chiri Tote Chin.” Then he calls up Take.

Take shows up and says, “Of course, I know Chiri Tote Chin very well. I used to eat it very often.” Take takes one bite, coughs and chokes over. Yet still, he manages to take another bite and says, “Mmm...Good.” Then Danna asks, “Well... Now what does it taste like?!” “It tastes exactly like rotten tofu!”

Tales of Tokushima

“The Tanuki War of Awa” Komatsushima City

About 150 years ago, when Tokushima was still referred to as “Awa”, there was once a large shop in Higaino (Komatsushima City, Tokushima Prefecture) named Yamatoya that sold items using cloth colored and designed with indigo. One day, Moemon, the owner of the shop, saw a group of children hurting a tanuki (raccoon dog) sitting in a tree hollow. “What are you doing? You’re hurting him! Get away!” he shouted, and came to the tanuki’s rescue. The tanuki that Moemon saved was Kincho. The kind shop owner decided to allow him to live in his house. After that, Kincho became the guardian angel over Yamatoya, and a lot of customers started to visit the shop.

One evening, a god appeared when Kincho was sleeping and told him “You must travel in order to become stronger.” When Kincho told Moemon this, he pleaded with Kincho. “It will be troublesome if our guardian angel leaves. Please don’t go.” However, Kincho promised him that he would return home and become the guardian angel, then left the house.

After leaving, Kincho and another tanuki named Ohtaka went to Anagannon Castle located in Mt. Tsuda (Tokushima City), which was the residence of the strongest tanuki in all of Shikoku, Rokuemon. He welcomed them with open arms and said, “You’ve come all the way from Komatsushima? I wish you both the best.” Then, the both of them learned all they could and became increasingly stronger by the day.

Rokuemon had a daughter named Princess Kanoko who fell in love with Kincho. Rokuemon looked favorably upon Kincho who was growing stronger every day and asked him to become his own son. However, he politely declined “Though I am grateful for this opportunity, I have already made a promise to return to Komatsushima and become the guardian angel of Yamatoya. I’m sorry, I am unable to become your son.”

Rokuemon assumed that because Kincho rejected such a great offer, he must have been plotting to return to Komatsushima, gather his fellow tanukis, and attack Anagannon Castle. So, Rokuemon gathered all of his fellow tanuki. “Capture Kincho!” he ordered. Kincho and Ohtaka ran as fast as they could towards Komatsushima to escape. However, they could not run any further once they got to the Katsuura River. The river was behind them. “Run ahead of me!” Ohtaka exclaimed, then threw Kincho to the Katsuura River. Ohtaka fought as hard as he could by himself just so that Kincho would be able to swim and run far away, but was killed in the end. Kincho was able to run away safely thanks to Ohtaka. Having heard Kincho’s story, Ohtaka’s son and brothers gathered to seek revenge. Around the same time at Anagannon Castle, Princess Kanoko cried and pleaded with her father Rokuemon many times “Tanukis must not fight against each other. Please find a way to stop it.” However, Rokuemon did not listen to his daughter’s words. Princess Kanoko became sad because her father and the person she was in love with were fighting, and jumped from a cliff and fell to her death. Rokuemon gathered his fellow tanuki at the Katsuura River and said “Kincho is at fault for my daughter’s death. Kill Kincho right away!”

With this, the “Awa no Tanuki Gassen” (The Tanuki War of Awa) began. 600 Tanuki gathered in each area of Tsuda and Komatsushima. The war continued for three days. Kincho finally won against Rokuemon at the Cliff in Tsuda where Princess Kanoko died at.

Kincho found his way home to Komatsushima with his injured body. After arriving at Yamatoya, he went to Moemon, gave his

thanks for everything, relinquished his energy, and passed away. Moemon strongly believed that Kincho was extraordinary and gave him the posthumous name of "Kincho the High God". He made a shrine for Kincho who became a God, and made offerings of food and gifts. Even now, people visit and pray at Kincho Shrine, located on the foot of Mt.Hinomine.

“The Prophesying Jizo” Kitajima Town, Itano District

Once upon a time in Minamikoda-mura (Kitajima Town, Itano), there was a community that harvested rice in the rice paddies. However, they were troubled by the nearby flooding from the Yoshino River, Shikoku's largest river, after large rains. The people of the village and placed a Jizo (Bodhisattva; a deity that protects people from suffering) on the tall river bank they made.

One day, it rained from the late afternoon. The village people thought "There is nothing to worry about if it's only raining this much", and fell fast asleep after a long day in the rice fields. However, in the middle of the night the rain became violent and it started to pour. Then, a loud voice followed "The bank broke! We must hurry and run away!" Everyone in the village was surprised and woke up because of the loud voice. When they looked at the river, the water had already risen to the top of the bank. "This is horrible, we must hurry and escape!" The people of the village somehow made it to Kourenji Temple located at higher grounds.

Again, the loud voice could be heard "The bank broke!" Then, the thrashing waters overflowed from the Yoshino River and swept away newly planted rice crops and flowers, and numerous homes. When this happened, a young boy swam to the bank, placed the Jizo on his back, and returned to the temple. Everyone was surprised that he carried the large stone Jizo the same size as him on his back, despite being pulled away by the water. "Why did you carry the Jizo?" the priest of Kourenji Temple asked. "The Jizo appeared in my dream and told me that the bank will break. If I just left it, such a Jizo would have been swept away by the waters", the young boy replied. The priest paused in reflection, then asked the villagers "Who said that the bank would break, or that it did break?" However, none of the villagers could respond. "I see; it was the Jizo. The Jizo is the one who told us." When the people of the village heard this, they expressed their gratefulness to the Jizo from the bottom of their hearts. The Jizo was named the "Yumezuke-Jizo" (The Prophesying Jizo), and placed carefully in the garden of Kourenji Temple. Every year, a festival is held at this temple.

“Rice from the Mouth of Kannon” Suketou Honchou, Tokushima City

This story happened from around the time that Tokushima was known as "Awa Province". In Suketou, there was a temple called Guseiji Temple. It was very poor, and the wall that surrounded the temple was broken in a few areas. The priest of Guseiji only chanted the nenbutsu (a type of prayer) all day long. However, the temple continued to become increasingly poor because he was only dedicated to chanting the nenbutsu. One day, the young monk of the temple asked "Priest, we don't have any rice for breakfast. What shall we do?" "When we run out of rice, there is still potatoes. And if there are no potatoes, we will not eat anything and chant the nenbutsu." the priest responded. Many of the young monks left the temple, then finally, there was only one monk.

His only option was to sell all of the items in the temple that seemed worthy of selling, and buy rice. "The last thing left is the Kannon statue that you pray to every day. Shall we sell it?" he asked. The priest responded with anger "What type of bad luck nonsense are you speaking of? If you worship with all your heart, you will see the path. Sit down and pray."

"That would be too easy. If we could eat rice just by praying." the monk murmured to himself. Then, he started to chant the nenbutsu. As they continued to pray "Namamidabu, Namamidabu...", they started to hear a strange sound. "Pitter patter, pitter patter, pitter patter..." When they opened their eyes, the Kannon figure in front of them began to spit out grains of rice from its mouth. There were enough shimmering grains of rice to feed the both of them. This became the rumor of the town and many people came to see this. The offerings to the temple increased, and life at the temple became a little easier. However, the monk was greedy enough to think that if Kannon could spit out more rice, they could profit even more.

One day as rice started to pour out from the mouth of Kannon as usual, the monk took a red hot metal charcoal chopstick and put it in the mouth to widen the size. "Let's make your mouth larger so you can spit out more rice." However, after this Kannon no longer spit out rice. Guseiji Temple then turned back to its poor state. It is said that the monk was kicked out of the temple or cursed by Kannon and died. Nobody knows what happened to the monk.

The Teachings of a Sennin Nishi Iya Yama Village, Miyoshi City

* *Sennin: a mountain hermit who has an immortal power; an immortal*

Once upon a time, a blind mother, and her dutiful son lived together. The son made straw sandals and sold them to buy

things that his mother wanted. Being the son he was, he felt pity for his mother. One evening, he saw a dream and God spoke to him. "There is an immortal in the mountains. Go there and ask him to heal your mother's eyes." The son was glad that his daily prayers to God had paid off. The next morning, he prepared some bento boxes and left the house. As he began to walk, he saw the choja (the wealthiest man of the village). "You're up early, where are you going?" he asked the son. "I'm on my way to ask the immortal living in the mountains to heal my mother's eyes." the son responded.

"That's great. My daughter has been sick and bedridden for three years. Could you ask the immortal about what I should do?" the elder responded. "Sure, I will ask." The son began to walk in the direction of the mountains.

The evening arrived and the son stayed at a farm. The head of the farm asked the son about his destination. When the son said that he is going to meet the immortal, the farmer asked him for a favor "This is perfect timing. Three of my mandarin orange trees have not produced one fruit for the past three years. Can you ask the immortal for a solution?" The son agreed to help the farmer, and early the next morning he departed. After passing through many mountains and valleys, the son came across a tall cliff that seemed impossible to climb. As he looked up at the cliff with a troubled expression, a large snake appeared and asked where he was going. When the son answered that he was going to meet the immortal, the snake said "This is perfect timing. I can help you reach the top of the cliff. I have been in ascetic training, crossing rivers and mountains for thousands of years, but have never been able to reach heaven. Could you ask the immortal what I should do?" Once the son promised to help, the snake whipped his tail down to the son. After grabbing on to the snake's tail, the son was lifted to the top of the cliff. After arriving at the top, he passed through a couple mountains and valleys, then finally arrived at the house of the immortal. When the son arrived at the mountain, "I am living at the bottom of the mountain, and have come to ask you a few questions. Please give me some answers." "Yes, I can give you answers, but I can only share three things with you." the immortal replied. The son thought about it. There were four things he wanted to ask for, but decided to ask the questions requested of him instead. "For the choja's daughter, she will be instantly healed by making the young man she meets first her husband. There is a money chest buried at the roots of the farmer's mandarin orange trees, if you dig it out, all harmful substances from the metal will disappear and the fruit will grow on the trees. There is a gem in the large snake's head. If you take it out, it will grant your wishes." the immortal replied. The son expressed his appreciation many times, and climbed down the mountain immediately.

First he told the snake its answer, and the snake asked the son to take the sword on his tail to open the bump on his head. When the son used the sword to make a cut, the bump on the snake's head opened. He placed his hand inside of the bump and found a white gem. The snake took him from the top of the cliff to the bottom, and gave him the sword and the gem. Then the snake rode to heaven on a black cloud that descended from above.

Next, the son told the head of the farm to dig up the roots of the mandarin orange tree. When he did so the next day, three money chests appeared. The head of the farm was very pleased, and gave one of the boxes to the son as a thank you.

Lastly, the son went to the home of the choja in his village and told him "If you make the first young man that your daughter meets her husband, she will be healed." Then, the daughter who was sleeping in the room next door opened the door expressed her thanks. "Thank you very much for helping me." she said and then looked up at the son. Then, in the blink of an eye she surprisingly became healthy enough to walk again. When the choja saw this happen, he was pleased.

"The first young man that my daughter saw was you! She has been healed from her illness. Please become my son-in-law." However, the son declined "I'd feel sorry for my blind mother because I was unable to grant her wish." He then returned home. "Mother, when I went to the mountains, I asked for the wishes of three people, but was unable to ask about your eyes. I'm very sorry. I'll go back to the mountains again and ask the immortal, so please give me some time." he apologized. He then told his mother about his recent journey, and had her touch the items "This is the gem and sword that the large snake gave to me." Miraculously, the mother's eyes opened widely right after touching the objects. The mother and son embraced each other in joy. Then, the son became the son-in-law of the choja's house and everyone lived happily ever after.

德岛的瑰宝 “阿波舞”

提到德岛少不了“阿波舞”。阿波舞已有 400 多年历史，是闻名日本，享誉世界的德岛传统艺能之一。

每年 8 月中旬的盂兰盆节时期，德岛县内各地都会举办阿波舞节。规模最大的阿波舞节要数 8 月 12 日至 15 日，连续举办四天的德岛市阿波舞节。每年有 100 多万人从日本全国以及世界各地造访德岛。

最近，除了夏天，阿波舞还融入到各种活动和庆典中，能够随时享受到阿波舞的乐趣。

●阿波舞的连

跳阿波舞的队伍和团体称作“连”。“连”的数量超过一千多支，一般以企业、大学、各类团体等为单位组成。其中不乏舞艺精湛的“连”，通称“有名连”。



有兴趣一起跳阿波舞的各位不妨加入德岛县国际交流协会的队伍“ARASOWA 连”。每年的 8 月 14 日当天跳阿波舞，同时祝愿“世界和平，没有纷争”。让我们一起欢跳吧！（7 月份开始报名）如果想当天体验，可以参加“NIWAKA 连”，无需预约，免费参加。

●阿波舞的种类

阿波舞分为男舞和女舞。无论那种，基本动作都是先同时伸出右手和右脚，然后收回，再同时伸出左手和左脚，然后收回，如此反复。

男舞要放低腰部，动作强劲有力，舞姿轻快，具有动感。不光是男性，女性和小孩也会去跳男舞。

女舞则头戴草笠，脚穿木屐，高举双手跳阿波舞。舞姿优美，整齐划一。

●鸣物（乐器）·骚韵

阿波舞的传统乐器有钲、日本鼓、缔太鼓、大太鼓、横笛和三味线。这些乐器演绎出阿波舞特有的两拍子节奏，轻快悦耳、充满朝气与活力。这就是“骚韵”。让我们随着骚韵一起跳舞吧。



“跳的也是傻瓜，看的也是傻瓜，既然都是傻瓜，何不一起跳呢？”

这句喻意为“与其看阿波舞，跳阿波舞更有意思哦！”

“Yatto saaah!Yatto,yatto!”请大声喊出阿波舞的口号，

尽情享受阿波舞和充满魅力的德岛之夏。

日常生活中的阿波舞

在德岛，在日常生活所到之处，无时无刻都能感受到“阿波舞”的存在。

德岛阿波舞机场

“德岛阿波舞机场”是进德岛的空中之门。想必很多人听到这个名字都会大吃一惊吧。



漫步在德岛市区，能在许多地方不经意地发现阿波舞的元素。让我们一起来探索吧！

首先是 JR 德岛站前，红色的“邮筒”、红绿灯的灯柱和人行道等处都能看到阿波舞的图案设计。

新町川边上的蓝场滨公园公共厕所的墙壁上也绘有阿波舞。

横跨新町川的新町桥和两国桥的两端和桥上，能发现很多阿波舞的设计和元素。

各位去过坐落在德岛市眉山山脚下的“阿波舞会馆”吗？
这里每天都有阿波舞的演出，会馆前的广场上还有草笠状的休憩场所。

绀屋町的主干道上有“阿波舞机械时钟”，导游手册中也有相关介绍。
从上午10点至晚上8点，每隔2小时的整点时分，阿波舞偶人们会在阿波舞（骚韵）的伴奏下翩翩起舞。

晚上6点和8点还有特别的七彩LED照明，透过灯光可以欣赏到阿波舞剪影彩绘。
走过路过，千万不要错过！



光是德岛市中心就有如此多的阿波舞设计与元素。不妨顺着这张地图走一圈，看看能发现多少？另外，各位所住的城市，或许在意想不到的地方也隐藏着阿波舞的元素，有空一定要找找看哦。

“遍路朝拜”巡访四国八十八所寺院

遍路朝拜是距今大约1200年前，佛教宗派之一的“真言宗”僧侣“弘法大师”（空海）的修行之地，即巡访朝拜“四国八十八所灵场·寺院”。

如今，遍路朝拜已超越宗教范畴，许多人从日本全国和世界各地远道而来，巡访这片神秘的圣地。朝拜的目的各有不同，有“寻找自我之旅”，有“休闲放松，寻求治愈之旅”，还有祈祷身体健康、事业有成、恋爱和结婚等诸事顺心如意。

八十八所寺院的第一所寺院（第一门关）“灵山寺”正坐落在德岛县鸣门市的大麻町。

从第一所寺院按照顺序走遍路称作“顺走”，按照德岛县、高知县、爱媛县、香川县的顺序，用50天左右的时间走完全长1400公里的遍路。最近，有很多人通过自驾或乘公共巴士的形式，分多次进行遍路朝拜。

此外，从第八十八所反方向走回第一所称作“逆走”，据说这样能实现三倍的心愿。

据称弘法大师至今仍在位于和歌山县的总寺院“高野山奥之院”内修行。为此，许多人在巡访完八十八所寺院后，来这里“结缘（佛教用语，即满愿）”。

现在，四国地区的4县正在积极努力，争取将四国八十八所寺院及遍路道申请为“世界遗产”。

布施接待

遍路朝拜时，经常会有路人或当地人亲切地和你打招呼，比如“请加油！”“辛苦啦！”有时还会递上饮料和食物。这种物质和精神上的鼓励和馈赠统称“布施接待”。

同行二人

遍路朝拜者佩戴的斗笠上写有“同行二人”的字样。即便是独自一人踏上遍路之旅，也要时刻牢记：“弘法大师”就在我们身边，一直保佑我们。

路面上的井盖艺术



各位猜猜照片里是什么？这是路上随处可见的“窰井”井盖。现在，时髦的“井盖艺术”已成为一种潮流，风靡日本和全球。

这些井盖中，有些设计成当地著名的景点、美食、代表性的花草等，也称作“当地专属井盖”。有的还绘有著名动漫作品中的主人公。

下面，让我们见识下德岛的井盖中有哪些与众不同之处？

鸣门市

鸣门市的井盖。图案为著名的“大鸣门桥”和“鸣门漩涡”。右边的井盖上还设计有鸣门的特产，“鲷鱼”和“梨子”。

吉野川市鸭岛町

因菊花偶人而闻名的鸭岛町的井盖。设计有“菊花”的图案。每年10月下旬至11月下旬期间，吉野川市役所前的活动广场及JR鸭岛站前等处会举办菊花展。

吉野川市川岛町

川岛町的井盖上绘有川岛的象征“川岛城”。左边井盖上的图案，除了川岛城，还有“高越山”、“钓鲑鱼”、“潜水桥”等元素。

海部郡美波町

作为海龟产卵地而广为人知的海部郡美波町的井盖。设计有海龟的图案。每年5月至8月，红海龟会到大浜海岸产卵。另外，海龟博物馆“Caretta”中种类丰富的各种海龟也会让你大开眼界。



路上除了窰井井盖，还有其他各式各样的盖子。

美马郡脇町

这些盖子上绘有卯建古街的“短墙”。

建不起卯建（没有出头之日）

“卯建”是指建在自己家和隔壁家之间的防火短墙（发生火灾时，为防止隔壁家的火势蔓延至自己家而建造的墙壁）。建这堵短墙要花很多钱，因此只有有钱人家才建得起，故有“建不起卯建”的说法。意指“一直没有出头之日”，“没有出人头地，生活过得不好”。

鸣门市

这是鸣门市的消防栓。绘有消防梯的车图案。小朋友应该会很喜欢哦。



德岛的井盖艺术如何？各位即便不了解当地的情况，也能透过井盖艺术与设计知悉当地有名和独具特色的东西。

井盖艺术风格各异，生动有趣，令人赏心悦目。各位的祖国也有类似这样的井盖吗？

如果曾经错过这些路面的井盖艺术，不妨在今天回家的路上，或是明天外出的时候，留意自己的脚下，也许会有出乎意料的新发现哦。

去“稻草人之乡”名顷看看吧！

各位知道“稻草人”吗？

起先，稻草人是仿照人的模样做成的假人，放在田地和苗圃中，防止鸟类偷吃庄稼。

各位的祖国也有“稻草人”吗？如果有的话，会是什么形状？

其实，德岛县有一个地方，那里的“稻草人”数量比人要多。那里是三好市东祖谷的名顷地区，位于奥祖谷双重蔓藤桥的西面。村落里的居民不到30人，但是和人一模一样的“稻草人”却有180只，遍布全村的各个角落，“稻草人之乡”也因此得名。这些稻草人全部由当地的一位女性独立完成。据说她做稻草人已有14年之久，迄今做了约400只稻草人。

为何会如此出名？2014年有位德国留学生拜访了稻草人之乡，将所见所闻制作成短片公开在网上。现在已有50万播放量，很多外国游客也慕名前来一探究竟。

各位也不妨去看看。或许你会误把这些稻草人当做真人，在无意间寒暄客套一番。

“垃圾零排放之町”“彩叶之町”上胜町

群山环绕的上胜町。梯田美不胜收

青苔密布，小有名气的“山犬嶽”

垃圾零排放之町

从德岛市驱车约1个半小时，就能抵达位于深山中的“上胜町”。如今，这个人口约1600人、老年人占半数的村落正受世

界瞩目。

说起缘由，该地区于 2003 年宣布“要在 2020 年之前实现整个地区的垃圾零排放”，并努力实现这一目标。

各位现在所住的地方，是将垃圾分成多少种类进行收集的？3 种还是 5 种？各位的祖国又是什么情况？或许大多数国家是不分类回收垃圾的。

但在上胜町，垃圾共分为 13 大项、45 种类进行回收。更令人惊奇的是，其中 80% 以上是可回收再利用的。

上胜町垃圾零排放宣言

为了将新鲜的空气、清澈的水源和富饶的大地留给子孙后代，我们决定要在 2020 年之前实现上胜町的垃圾零排放，这就是上胜町垃圾零排放宣言。

- 1) 努力培养维护地球清洁的子孙后代！
- 2) 努力推进垃圾的回收再利用和再生资源化，在 2020 年之前实现垃圾的零焚烧和零填埋。
- 3) 努力在全世界寻求志同道合者，共同保护地球环境。

上胜町的这些举措正受到日本全国和全世界的关注，每年约有 2500 人专程来此观摩并学习这里的垃圾回收处理方法和理念。

彩叶之町

从海外造访日本的各位，想必会在品尝日本料理时为“日本料理之美”惊叹不已吧。除了美味的料理、精致的器皿，还有随四季变化的彩叶和鲜花。这些统称“つまもの (TSUMAMONO、菜品装饰)”，而上胜町从 30 多年前就开始了“彩叶”商务。

这个约 1600 人的地区住着大约 160 户从事农业的老年人。如今，他们用电脑和手机接受订单，并将采摘的彩叶发往日本全国各地。

“枫叶”和“银杏树叶”等，每年有超过 300 种彩叶活跃在日本全国各地的料理店中。德岛上胜的彩叶吸引着无数美食爱好者的眼球，为日本料理增色添香。

德岛的美丽山间之町“上胜町”，正在大放异彩！

“地震大国 日本” 做好在地震中保护自己生命的准备！

如今，世界各地时常发生大型地震和海啸，火山喷发频繁。

在日本，2011 年“东日本大地震 (3.11 大地震)”引发的巨大海啸冲毁了无数城镇和房屋。自那以后，又发生了几次大地震和无数次小地震。因此，像日本这样地震频发的国家称作“地震大国”。

今后 30 年之内，专家预测德岛县将有 70%~80% 的几率发生里氏 9.1 级，地震烈度 7 级的“南海海槽巨型地震”。

德岛县如果发生这样巨型的地震，75% 的建筑物将倒塌，近海区域将发生海啸。即便是距离海岸 10 几公里的场所也不能掉以轻心。海啸会顺着河流涌至内地。同时还可能发生山崩、道路坍塌和火灾。

我们无法预测何时何地会发生地震。海啸也有可能来到你所居住的区域。当发生地震和海啸时，应该逃往何处？建议先查好相关信息，并从今天开始做好预防地震和海啸的准备工作。

		
<p>紧急出口</p> <p>在建筑物内部为逃生路线而困扰的话，请从此处逃生。</p>	<p>广域避难场所</p> <p>发生地震时的紧急逃生场所，为临时性避难场所。</p>	<p>避难所</p> <p>地震避难者在危险完全消失前可以一直生活的场所。</p>



发生海啸时，请尽快逃往高处！

海啸相关标识

		
注意海啸 海啸可能来袭的危险区域	海啸避难场所 海啸时可以逃往的高处	海啸避难大楼 海啸时可以逃往的高楼

准备工作

- ①使用五金固件或支棍固定家具及电视等家用电器，防止倒塌。
- ②事先准备好 3 天的食物、水和生活用品，发生地震时可立即携带出门。
- ③事先准备好 1 周的食物、水和生活用品，在地震结束后使用。
- ④事先查好地震和海啸发生时的避难场所和逃生路线。
- ⑤记好各种紧急联系方式（大使馆及家人的联系方式）和护照号码等信息。

发生地震时

- ①首先保护好头部和身体。（躲在桌子下面。远离家具、窗户、电灯等。）
- ②如身处住宅、公寓或大楼内部，请勿使用电梯，从楼梯逃生。
- ③如身处电梯中，请立刻按全部楼层的按键，电梯停下后，迅速离开电梯。
- ④海啸很有可能抵达海岸及河川附近，即便是高及膝盖的海浪，也能把人冲走。

海啸有可能抵达德岛市内海拔 5 米高的场所，以及德岛县南部海拔 10 米左右的场所。特别是离海较近的人，请立刻逃往山上或 3 楼以上的高处。

- ⑤请勿驾车逃生。如发生交通堵塞，则无法动弹。
- ⑥停电或离家外出时，请务必关闭电闸。如没有关闭，恢复供电时很有可能引发火灾。



有关防灾的具体信息，请点击 TOPIA 主页左侧的“防灾安全情报”栏目进行查阅。

德岛的吉祥物 ※ 卡通形象

各位对吉祥物了解多少？如今，日本全国各地有很多为当地加油助威的卡通形象。例如大家所熟悉的熊本县的“熊本熊”和爱媛县的“小黄鸡”。其实德岛也有很多吉祥物（卡通形象），接下来给各位一一介绍。每个吉祥物都具有当地的特征（著名的场所或食物等）。因此，可以从吉祥物中窥见和了解当地的特色。下面就让我们一起来看看各地的吉祥物及当地的介绍吧！

多宝（TOPPY）

德岛县国际交流协会（TOPIA）于 1990 年成立。为纪念成立 10 周年，TOPIA 的吉祥物多宝于 2000 年诞生。多宝中蕴含着许多德岛的著名景点和特产等元素。多宝利用头部的大型天线从全世界收集各种信息，祈求地球的和平。

酸橘君

德岛县的吉祥物，酸橘君。首次登场于 1993 年，作为东四国国民体育大会德岛县的吉祥物大放异彩。现在仍活跃于德岛县及日本全国，努力宣传德岛。它的梦想是将德岛县介绍给全世界。特技是它那独具魅力的可爱笑容，散发着“健康维他命”，令所有人充满朝气和活力。

TOKCY

2012 年诞生的活泼可爱的鱼之精灵“TOKCY”。向日本全国介绍和宣传德岛市的魅力，努力将德岛市变成欢乐活力之城。是个喜欢阿波舞和聊天的女孩子。

漩涡君 漩涡公主

“漩涡君”是鸣门市建市 50 周年，即 1996 年诞生的。随后，“漩涡公主”于 2012 年作为“漩涡君”的搭档正式登场。为了令鸣门市更具活力，它们正活跃在各个舞台。

KOMAPON（小松狸）

小松岛是“阿波狸猫合战”中金长狸猫的故乡。传说中身强力壮的著名武士（源义经）去打仗的时候，也来到这小松岛之地。

以金长狸猫和武士“源义经”为原型，强壮可爱的金长狸猫“KOMAPON”从此诞生。如今正在积极宣传小松岛的好去处和美食。

阿南南

阿南是四国最东部的城镇，是四国地区最早能看到日出的地方。阿南南从“光之城镇阿南”盛开的向日葵中诞生，宛如狮子的阿南南拥有花朵和光芒的鬃毛，具有不可思议的力量。

在丰富的自然之光和人类创造的新型光源的照耀下，阿南南正茁壮成长。

YOPPY PIPPY

位于“四国三郎”吉野川中流南岸地区的吉野川市有着美丽的杜鹃花和梦幻般的萤火虫，因“甘甘娘”玉米和美乡町的梅酒而享有盛名。2003年出生于吉野川的水之精灵“YOPPY·PIPPY”首次在吉野川游园地展开活动。现在，两人齐心协力，大力推广并宣传吉野川市的旅游景点和特产。

贮藏丫头

13岁的女孩子，作为胜浦町贮藏蜜柑宣传推广角色正式登场。有着动漫角色特有的水灵灵的大眼睛和维他命色彩（蔬菜和水果的颜色），造型统一，独具魅力。

紫藤姑娘

“紫藤姑娘”是从石井町的“藤”花中诞生的花之精灵。有着藤花造型的长辫子和能够飞往任何地方的翅膀。作为石井町的吉祥物备受青睐和喜爱，活跃在各个地方。

柚子婆婆

木头地区的柚子特别有名。柚子婆婆是在人们采摘柚子时散发的香味中诞生的精灵。作为柚子的精灵，活跃在四国山脉的山间村落。在柚子田里努力干活，精力充沛的柚子婆婆的口头禅是“いけるいける（德岛方言：没问题、没问题！）”。

FURURUN（风流琉）

取自海部川风流马拉松的“风流”二字，“FURURUN”是海部川的精灵。于2009年2月22日（第1届马拉松大会）诞生。梦想着有朝一日，海阳町和海部川风流马拉松能够闻名日本全国。性格活泼可爱，天真烂漫。

松茂股长

原本是住在月亮上的玉兔，下凡考察地球时喜欢上了松茂町，从此定居下来。它特别热爱松茂町，并将许多当地的特产带在身上。无忧无虑的松茂股长最喜欢的交通工具竟然是“飞机”！兴趣是将钓到的鱼和松茂的特产一起做成美味佳肴。

蓝之助

有着可爱的大眼睛，和蔼可亲，悠闲自得。喜欢和所有人主动搭话，嘘寒问暖的“蓝”之商店的店长。十分注重礼仪，打招呼都是双手作揖，彬彬有礼。特别喜欢和孩子们一起玩耍，手牵手、猜拳都是拿手好戏。主要工作是推广蓝住町的特产蓝染，宣传特产品的魅力。

柿子爷爷

柿子爷爷出生成长于上板町大山地区，这里盛产又大又甜的柿子。原本过着悠闲宁静的田园生活，以种柿子为生，后来下定决心要向日本全国宣传自己的故乡上板町。虽然已经是老爷爷了，但依旧宝刀不老，十分活跃。

使用简单日语的落语表演

落语（日本的单口相声）

是一种源于约400年前（江户时代）的日本传统技艺。

其表现形式为，表演者1个人扮演各式各样的角色，边通过不同的声音来讲述趣事，边使用扇子和手帕等物件来表现多种多样的动作及心情。

时乌冬面

【出场者】乌冬面摊主，客人，某男子

某天夜里，1个男子叫住了乌冬面摊主，点了碗乌冬面。“味道真香呀”“真好吃啊”这个客人对乌冬面摊主是赞不绝口，摊主也因此心情大好。一碗乌冬面的价格是16文钱，这个客人吃完了乌冬面后，将钱一个一个数给乌冬面摊主。“1个，2个，3个，4个，5个，6个，7个，8个……”数到这里，客人突然问起摊主“现在几点了”，摊主答曰“9个”。这个客人便接到“10个，11个，12个……”，最后只付了15文钱。

在一旁见到此景的某男子想“我也不妨试试看这么干”。第二天，他找到乌冬面摊点了一碗乌冬面。可是乌冬面却一点儿也不好吃，他也因此根本没对乌冬面摊主夸出口。一碗乌冬面的价格是16文钱，男子吃完了乌冬面后，将钱一个一个数给乌冬面摊主。“1

个，2个，3个，4个，5个，6个，7个，8个……”数到这里，他也突然问起摊主“现在几点了”，摊主答曰“5个”。他便接到“6个，7个，8个……”，最后却付了19文钱。

CHIRITOTECHIN

【登场人物】 老爷 邻居的阿梅 邻居的阿竹

邻居的阿梅来到老爷家里拜访。老爷每次都准备很多菜肴招呼客人，阿梅每次都很开心地说：

“好吃，好吃！能吃到这样的美味真是三生有幸。”

看到阿梅，老爷若有所思。与阿梅相比，同样住在附近的阿竹却截然不同。每次都向老爷抱怨，

说什么“不好吃”，“我知道这个食物”，“就没有更珍奇的东西了吗？”

恰逢某日，摆在柜橱里的豆腐因摆放时间过长已经腐烂，不仅缩得很小，而且还长了红绿色的霉。老爷看到这块豆腐，便突发奇想，要让一直装作无所不知的阿竹来尝尝这块腐烂的豆腐，调戏调戏他。

老爷将腐烂的豆腐捣烂，加了酱油和芥末，装入华丽的盒子里，贴上包装纸，美其名曰“长崎名产 CHIRITOTECHIN”。并立刻将阿竹喊过来。

来到老爷家的阿竹说：“我知道 CHIRITOTECHIN，很久以前经常吃这个，好怀念！”便张口要吃。但是却感觉哪里不太对劲，被呛得直咳嗽。

即便如此，阿竹硬着头皮一边吃，一边说“太美味了”。

此时，老爷问阿竹“味道如何？”“有那么点豆腐腐烂的味道……”

德岛民间故事 《阿波狸猫合战》小松岛市

距今大约150年前，当时德岛县被称作“阿波之国”。日开野（地名：现德岛县小松岛市）有一家叫“大和屋”的商店，使用蓼蓝（植物名）在布料上染制各种蓝染图案并出售，店铺规模很大。

一天，商店主人茂右卫门外出时，看到一群小孩正在欺负一只躲在大树洞里的狸猫。

“你们在干什么！不觉得它可怜吗？还不放了它？”茂右卫门大声怒斥，解救了这只狸猫。

茂右卫门解救的狸猫名字叫做金长，决定认善良的茂右卫门为主人，并在大和屋安居下来。自那时起，金长成为大和屋的守护神，店里的客人也越来越多，生意特别兴隆。

某晚，金长在梦中遇到神仙，神仙指点金长：“你要出门远游，只有这样才能变得更强。”大和屋的主人茂右卫门得知此事，立刻请求金长：“守护神出去了，我可怎么办呀？请千万不要出游啊！”但金长许下一定会回来继续做守护神的诺言，便离开了大和屋。

不久，金长和一只叫大鹰的狸猫一起来到津田山（地名：现德岛市）的穴观音城，拜四国地区最强的狸猫六右卫门为师。六右卫门喜出望外，对金长和大鹰说：“你们专程从小松岛过来，可要好好加油！”自此，两人勤学苦练，变得愈来愈强。

六右卫门有个宝贝闺女，叫鹿之子姬。鹿之子姬喜欢上了金长。六右卫门也对变强的金长特别满意，便劝金长与女儿成婚，做自己的女婿。没想到金长却说：“非常感谢您的一番美意，不过我已经答应要回小松岛做大和屋的守护神，所以无法成为您的女婿。非常抱歉。”郑重回绝了六右卫门。

六右卫门思忖着：“居然拒绝如此美差！难不成要回小松岛，召集上狸猫同伴来攻打我这穴观音城？”立刻命令手下的狸猫“给我抓住金长！”金长和大鹰见势不妙，便拼命朝小松岛方向逃跑。飞奔至胜浦川的两人时已经精疲力尽，无力再逃。前有大河，后有追兵。这时，大鹰对金长说：“拜托！你一定要逃出去啊！”接着便将金长推到胜浦川中。大鹰为了给金长争取逃跑的时间，奋力苦战，最终被杀。金长在大鹰的帮助下，好不容易逃回了小松岛。

听了金长九死一生的经历，大鹰的儿子和兄弟，以及众多狸猫同伴义愤填膺，集结到一起发誓要为大鹰报仇雪恨。

消息传到穴观音城，鹿之子姬再三含泪恳求父亲六右卫门：

“本是同根生，相煎何太急。这样下去，津田和小松岛将有无数狸猫兄弟为此付出生命。万万不可啊！”

但是，六右卫门完全不听女儿的劝告，执意要战。鹿之子姬因父亲和心爱之人决心一战而悲痛欲绝，跳崖自尽。

“女儿之死都怪金长。立刻给我杀了金长！”六右卫门说完便将所有的狸猫同伴召集到胜浦川。

传说的“阿波狸猫合战”就此打响。来自津田的六百只狸猫和来自小松岛的六百只狸猫在此一决雌雄，战斗持续了三天三夜之久。最后，金长把六右卫门逼至津田，鹿之子姬跳崖之处，经历一番苦战并最终击倒了六右卫门。

金长拖着伤痕累累的身体好不容易回到小松岛，回到“大和屋”茂右卫门的身边，感谢主人的相救知遇之恩。最后精疲力尽，当场死去。

茂右卫门特别钦佩金长壮烈的一生，尊奉其为“正一位金长大明神”。特意为升仙的金长建了神社，供奉食物和贡品。

至今，仍有很多人造访日峰山山脚下的金长神社，双手合十，供奉金长。

《托梦地藏》板野郡北岛町

很久以前，南古田村（地名：现板野郡北岛町）流传着这样一则传说。

村里的村民一直在田里种植水稻。可是，村子附近流淌着四国最大的河流吉野川，每逢下大雨，洪水便将稻田淹没。苦不堪言的村民们齐心协力建造了一座非常高的堤坝（在岸边用土垒成的高墙），并在堤坝上立了一座地藏菩萨（在苦难中守护人们的神明）。

“求地藏菩萨保佑，下大雨时务必保护这座堤坝万无一失啊！”

一天，傍晚时分下起了淅淅沥沥的雨。“这种程度的雨，没关系！”刚刚结束耕作，精疲力尽的村民们并没有在意，倒头便呼呼大睡。可是到了深夜，雨越下越大，瞬间大雨滂沱。这时，不知从何处传来一声巨响。

“河边的堤坝要塌啦！赶快逃命！”

声音震耳欲聋，村民们都从睡梦中惊醒，慌张起身。往河边望去，河水已经涨至堤坝最高处。

“这可了不得。大家快逃啊！”村民们惊慌逃向高处，好不容易来到光莲寺。这时，又是一声巨响：“堤坝已经塌啦！”

话音刚落，吉野川的洪水冲破堤坝，将田里刚刚开花的水稻和大片的农田房屋冲毁殆尽。此刻，有一位青年游到堤坝，背上地藏菩萨，奋力游回寺庙。背着和自己一样大的石头地藏，又是在如此汹涌的大水中游泳，大家都惊呆了。光莲寺的和尚问这位青年：

“你为何要将这尊地藏背过来？”

青年答道：“地藏菩萨托梦告诉我堤坝要塌啦。如果放任不管，这尊地藏怕不是要被洪水冲走。”和尚想了想，又问村民。

“堤坝要塌啦！还有堤坝已经塌啦！究竟是谁说的？”村民们面面相觑，却无人回应。

“原来如此，真的是地藏菩萨啊。原来是地藏菩萨托梦告诉我们的。”村民们恍然大悟，打从心里感谢这尊地藏菩萨。

如今，这尊“托梦地藏”被妥善安置在光莲寺的庭院中。每逢夏天，这里都会举行盛大的祭典活动。

《吐米观音》德岛市助任本町

德岛以前称作“阿波之国”，当时流传着一个传说。助任地区有一座寺庙叫弘誓寺。这个寺庙穷困潦倒，寺院的围墙不是这里缺一角，就是那里少一块，破烂不堪。庙里的和尚们每天从早到晚都在念经。这不，大家都专注于念经，寺庙也因此变得越来越穷。

一天，正在修行的小和尚对和尚说：

“师父，煮早饭的米没了，这可咋办啊？”

“米没了还有山芋。山芋没了就啥都不用吃，专心念经。”听师父这么说，小和尚只得将寺庙里值点钱的东西全部卖掉，再用钱买米。没多久，前来修行的小和尚们都跑光了，只剩下一个贪婪的小和尚。

小和尚抱怨道：“我受够啦！现在只剩下师父每天膜拜的观音菩萨。不如把它也卖了吧。”师父听了立刻怒斥道：“说这些可是要遭报应的！只要抛去杂念，诚心拜佛，就能豁然顿悟。你也一起来拜佛吧。”

“真是愚蠢至极！拜佛就有米吃的话，谁还会如此辛苦？”小和尚一边忿忿不平，一边跟着师傅念经。

“南无阿弥陀佛、南无阿弥陀佛……”没念多久，突然传来一阵奇怪的声音。

“哗啦、哗啦、哗啦！”“啪嗒、啪嗒、啪嗒……”定睛一看，面前的观音菩萨正从嘴里吐出大米。晶莹剔透、白花花的大米刚好够两个人吃。一传十、十传百，许多人都闻声前来膜拜，香钱逐渐增加，寺庙也越来越旺。可是，贪婪的小和尚却不知足，想要观音菩萨吐出更多的大米，趁机大赚一笔。

一天，观音菩萨开始吐米的时候，小和尚把烧得通红的火钳塞进观音菩萨的嘴里，想让嘴巴张得更大些。

“给我把嘴巴张大些！给我吐更多的大米！”

但是自那时起，观音菩萨便不再吐米。弘誓寺又变回原来那个贫穷破旧的寺庙。据说小和尚被逐出师门，受到观音菩萨的惩罚而死。后来，再也没有人知道这个小和尚的下落。

《仙人教诲》三好市西祖谷山村

很久很久以前，有位孝顺的年轻人和双眼失明的母亲生活在一起。年轻人每天靠做草鞋维持生计，用赚来的钱为母亲买喜欢的东西。为此，母亲一直觉得对不起自己的儿子。一天晚上，年轻人梦到神仙，神仙说：“山里有位仙人。你不妨去拜访他，求他治好你母亲的眼睛。”年轻人听完大喜，心想每天求神拜佛终于灵验了。

第二天早上，年轻人立刻带足干粮出了家门。没走多久，遇到了村里的富豪。富豪问年轻人：“这么老大早的，你是要去哪里？”

“我正要去拜访仙人，求他治好母亲的眼睛。”年轻人如实回答。

“那太好了！我的女儿三年间因病一直卧床不起，你能帮我向仙人打听是怎么回事吗？”富豪请求道。

“好的，没问题。”年轻人爽快地答应了，然后继续朝着山里走去。

走到傍晚，年轻人找了一处农家寄宿。农家的主人问及去处，年轻人如实回答要去拜访仙人。主人得知后便请求道：“那太巧了！我家的三颗桔子树已经三年没结果了。能帮我向仙人打听应该怎么办呢？”年轻人爽快地答应了，于次日清晨离开农家继续赶路。

年轻人翻过重重山岭，越过无数溪谷，终于来到一处悬崖绝壁之下。悬崖又高又陡，无法攀爬。年轻人束手无策，只能望着干瞪眼。这时爬来一条大蛇，问年轻人要去哪？年轻人如实回答要去拜访仙人。

“那真是太好了！我带你上去吧。我在这山上河里修行了千年有余，至今仍未得道升天。能帮我向仙人打听应该如何是好？”听完大蛇的请求。年轻人再次爽快地答应了。

话音刚落，大蛇便从悬崖上方将长长的尾巴放下来，让年轻人牢牢抓住。大蛇再用力一甩，年轻人便蹭的一声飞上了悬崖。之后，年轻人翻山越岭，历尽艰辛，终于来到仙人的住处。

“我住在山脚下，因有事相求前来拜访。请务必指点迷津。”年轻人恳求道。仙人点点头：“指点迷津可以，但只能告诉你三个。”

年轻人想了想，总共有四个请求，还是先解决大家的难题吧。

仙人一一指点：富豪的女儿只要嫁给第一眼见到的年轻男子，就能立刻恢复健康。农家的桔子树下埋着元宝箱，只要将元宝箱挖出来，毒素尽散，就能结出果实。大蛇头部有一个石球，只要将其取出，就能得道升天。年轻人听完，再三向仙人道谢，便立刻下山而去。

年轻人首先向大蛇说明原委，大蛇便让年轻人用蛇尾的利刃划开头部的巨瘤取出石头。年轻人用利刃划开巨瘤，伸手进去，掏出一颗白色的石球。大蛇将年轻人带至悬崖脚下，并将利刃与石球相赠。此时，天上飘来一片黑云，大蛇乘着云朵升天而去。

年轻人接着让农家的主人挖开桔子树下的土地。次日，农家的主人按照指示，果真从树下挖出三个元宝箱。主人喜笑颜开，将其中一箱作为谢礼送给年轻人。

年轻人最后来到富豪家中对富豪说。

“你女儿第一眼见到的年轻男子，只要将他纳婿，病就会痊愈。”话刚说完，一直在躺在隔壁房间的女儿突然打开门，向年轻人道谢：“多亏有你相助。”碰巧与年轻人双目对视的女儿突然奇迹般恢复了健康，能够活动自如。富豪见状更是喜出望外，对年轻人说：

“我女儿第一眼见到的年轻人就是你，这不，病也痊愈了。你干脆当我的上门女婿吧。”

“如果这么做，便对不起我那双目失明的母亲。我没能实现母亲的愿望。”年轻人婉言谢绝，回到家中。

“母亲，这次上山拜访仙人，路上受三人之托，结果没能请求仙人治好母亲的眼疾。请原谅孩儿。我会再次上山拜访仙人，请再等上片刻。”年轻人向母亲赔礼后，将此次出游的详细经过告诉母亲，并将石球和利刃放在母亲手中。

“这是大蛇相赠的石球，这是那把利刃。”母亲一摸便立刻睁开了双眼，真是不可思议。母子相拥，喜极而泣。此后，年轻人成为富豪的上门女婿，一家人幸福美满，长命百岁。

Báu vật của Tokushima 「Vũ điệu Awa」

Nếu nói đến Tokushima thì không thể không nhắc đến “Điệu múa Awa”. Điệu múa Awa có hơn 400 năm lịch sử. Hiện nay, nó là một nghệ thuật truyền thống mang niềm tự hào của Tokushima ở Nhật Bản và thế giới.

Vào khoảng giữa tháng 8 hàng năm, thời điểm lễ Obon, điệu múa Awa sẽ được tổ chức ở trong tỉnh Tokushima. Vũ điệu Awa với quy mô lớn nhất là vũ điệu Awa của thành phố Tokushima sẽ được tổ chức trong 4 ngày từ ngày 12 đến ngày 15 tháng 8. Mỗi năm có hơn 1 triệu người từ toàn nước Nhật và thế giới sẽ đến tham quan Tokushima.

Gần đây, ngoài mùa hè, bạn vẫn có thể thưởng thức điệu nhảy Awa vì có rất nhiều sự kiện và korabo (korabo là các sự kiện, các sự cộng diễn được tổ chức bởi các đoàn thể, xí nghiệp) Bạn có thể nhảy điệu Awa bất cứ thời điểm nào trong suốt một năm.

●Các đoàn nhảy của điệu nhảy Awa

Nhóm nhảy vũ điệu Awa được gọi là “Ren”. Có hơn 1000 “Ren” được hợp thành bởi các xí nghiệp, trường đại học, và các đoàn thể. Trong số đó, “Ren” thực hiện vũ đạo điều luyện được gọi là “Yume Ren”



Những quý khách muốn thử nhảy vũ điệu Awa, có muốn thử tham gia vào nhóm “Arasowa Ren” của Topia không? Vào ngày 14 tháng 8 hàng năm sẽ nhảy để cầu nguyện “một thế giới không có chiến tranh”. Nếu có thể hãy cùng nhau tham gia nhé (thời gian đăng kí là vào khoảng tháng 7). Nếu vào đúng ngày đó muốn tham gia thì có nhóm “Niwaka Ren” không cần đặt trước mà vẫn có thể nhảy được (miễn phí).

●Các kiểu múa

Trong vũ điệu này thì có 2 kiểu là múa kiểu nam và múa kiểu nữ. Với kiểu nào thì cũng có động tác múa cơ bản là, tay phải và chân phải, tay trái và chân trái cùng đưa ra rồi múa.

Múa kiểu nam thì hông sẽ được hạ thấp, động tác nhảy mạnh mẽ, sáng khoái, nhảy một cách rộn ràng. Không chỉ nam giới mà cả nữ giới và trẻ em cũng nhảy điệu này rất nhiều.

Mặt khác, múa kiểu nữ thì sẽ phải đội nón, mang guốc, tay giơ lên cao rồi múa. Dáng nhảy của tất cả các thành viên sẽ không lộn xộn một chút nào nên nhìn rất đẹp.

●Nhạc cụ (nhạc khí) • Zomeki

Nhạc cụ của điệu múa Awa thì có chuông lắc / phèng la, trống, trống shime, trống lớn, sáo, shamisen. Những nhạc cụ này tấu lên âm thanh nhẹ nhàng, sáng khoái của nhịp điệu 2 phách đặc biệt của điệu nhảy Awa. Những nhạc cụ này được gọi chung là “Zomeki”. Nào hãy cùng hòa nhịp với nhịp điệu của Zomeki và nhảy.



“Odoru ahō ni miru aho, onaji ahonara odora nya son son!”
Câu này có nghĩa là “So với nhìn thì nhảy sẽ vui hơn đó”
Hãy hòa nhịp với tiếng kêu gọi “tattosa~!yatto,yatto!” và tận hưởng mùa hè quyến rũ của Tokushima và Awa Odori.

Awa Odori trong cuộc sống hàng ngày

Ở Tokushima thì dù khi nào, dù ở đâu cũng có thể cảm nhận được sự gần gũi của Awa Odori với cuộc sống sinh hoạt.

Sân bay Tokushima Awa Odori

Đây là lối vào không phận của Tokushima : “Sân bay Tokushima Awa Odori”. Nhiều người có thể ngạc nhiên khi nghe tên này.



Nếu đi bộ qua thành phố Tokushima, sẽ thấy thiết kế của Awa Odori ở nhiều nơi khác nhau.
Nào, hãy cùng nhau tham quan nào !

Trước hết, ở phía trước ga đường sắt Tokushima, bạn có thể tìm thấy thiết kế của Awaodori trên thùng thư, trên trụ của đèn tín hiệu, trên vỉa hè.

Trên tường của nhà vệ sinh của Công viên Aibahama ở sông Shinmachi có tranh vẽ của Awa Odori.

Bạn có thể tìm thấy nhiều thiết kế của Awa Odori tại phía trước của cầu Shinmachi và cầu Ryogoku.

Bạn đã bao giờ đến “Awaodori Kaikan” dưới chân núi Bizan ở thành phố Tokushima chưa?

Mỗi ngày, ở đây sẽ có nhiều màn trình diễn của Awaodori. Ở phía trước hội trường có một nơi nghỉ ngơi trong hình dạng của một cái nón đan.

Ở Thị trấn Konya , trong sách hướng dẫn cũng có «Đồng hồ Awa Karakuri»

Từ 10 giờ sáng đến 8 giờ tối, cứ sau 2 giờ búp bê Awaodori được nhảy múa theo nhịp điệu(Zomeki) của Awaodori.

6 giờ và 8 giờ chiều thì sẽ có điều đặc biệt là bằng sự chiếu sáng của đèn LED 7 màu hình ảnh bóng của Awaodori được hiện ra. Chúng tôi nghĩ là quý vị nên đến đó xem một lần.



Chỉ là trong trung tâm thành phố Tokushima đã có rất nhiều thiết kế của AwaOdori rồi nhỉ. Nếu có thể , bạn hãy vừa nhìn bản đồ rồi thử đi bộ một lần nhé. Không biết bạn sẽ tìm thấy được bao nhiêu thiết kế nhỉ?. Thêm nữa, không chừng là nơi thành phố mà bạn đang sống cũng có thiết kế của AwaOdo ri ở một nơi mà bạn không ngờ đến. Nếu có thể hãy thử tìm xem nhé!

「Ohenro」 Tham quan 88 địa điểm ở Shikoku

Ohenro (hành hương) là việc đi thăm viếng “ 88 địa điểm chùa và nơi linh thiêng” nơi mà vị tu sĩ “Kobo Daishi” (Kukai) của “giáo phái Shingon” một giáo phái của Phật giáo đã tu hành cách đây khoảng 1200 năm về trước.

Bây giờ, vượt qua ranh giới tôn giáo, rất nhiều người từ khắp Nhật Bản và thế giới đến viếng thăm các ngôi chùa này. Mục đích là “một hành trình tìm kiếm bản thân”, “một chuyến đi rũ bỏ sự mệt mỏi và tìm kiếm sự chữa lành”, để cầu chúc cho sức khỏe, tình yêu, hôn nhân, hiện thực hóa giấc mơ trong tương lai.v.v.

“Chùa Ryozen” (nơi lễ viếng đầu tiên) là ngôi chùa đầu tiên trong 88 địa điểm, nằm ở thị trấn O-a-sa, thành phố Naruto, tỉnh Tokushima.

Chuyến hành hương bắt đầu từ ngôi chùa số 1 rồi lần lượt theo thứ tự được gọi là «Jun-uchi», người hành hương sẽ đi bộ khoảng 1400Km trong khoảng 50 ngày theo thứ tự từ tỉnh Tokushima ,tỉnh Kochi, tỉnh Ehime, và sau đó là tỉnh Kagawa. Gần đây, nhiều người chia chuyến hành hương thành nhiều chuyến và sử dụng ô tô và xe buýt để đi.

Ngoài ra, tương truyền rằng nếu đi theo chiều từ ngôi chùa thứ 88 ngược lại ngôi chùa thứ nhất gọi là “gyaku-uchi” thì khả năng điều mong ước sẽ thành hiện thực cao gấp 3 lần của “jun-uchi” .

Người ta nói rằng Kobo Daishi vẫn đang tu hành tại “một tu viện nằm sâu trong núi Koya” của Souhonzan ở tỉnh Wakayama, vì vậy sau khi viếng thăm 88 ngôi chùa, nhiều người đến đây để “ke-chi-gan”(kết nguyện).

Hiện nay, ở 4 tỉnh của Shikoku đang diễn ra các hoạt động để có thể đăng kí con đường Henro (hành hương) và 88 địa điểm chùa của Shikoku vào “di sản thế giới”

Osettai

Nếu bạn đang thực hiện một chuyến hành hương, người đi đường và người dân địa phương sẽ nói với bạn một cách tử tế “Cố lên nhé” hoặc “Làm tốt lắm”, cho bạn đồ uống và thức ăn. Những việc hỗ trợ về cả vật chất và cả tinh thần như thế này được gọi là “ Osettai”

Hai người đồng hành

Nếu nhìn trên nón của người đi hành hương sẽ thấy chữ “ hai người đồng hành” được ghi. Lúc đi hành hương người ta tin rằng dù có đi một mình đi chẳng nữa thì cũng luôn luôn có Kobo Daishi đi cùng để bảo vệ cho.

NGHỆ THUẬT NẮP CỐNG ĐƯỜNG PHỐ



Mọi người nghĩ bức tranh này là gì? Đó là nắp cống trên đường. Bây giờ, "nghệ thuật nắp cống" đang bùng nổ ở Nhật Bản và nước ngoài.

Trên nắp cống được thiết kế bằng những địa điểm nổi tiếng của thị trấn, thực phẩm, hoa v.v ..., và được gọi là "nắp cống của địa phương". Một số nhân vật chính nổi tiếng của anime đôi khi cũng được vẽ.

Chà, vậy hãy xem thử nắp cống ở Tokushima thì thế nào nhỉ?

Thành phố Naruto

Đó là nắp trong thành phố Naruto. Cầu ‘Oo-Naruto’ và ‘Uzu-Shio’ nổi tiếng được vẽ. Trong nắp cống ở phía bên phải, còn có các sản phẩm đặc biệt của Naruto, « cá hồng » và “quả lê” cũng được thiết kế.

Kamajima-cho, thành phố Yoshinogawa

Nắp cống của Kamajima-cho nổi tiếng với hình búp bê hoa cúc. Nắp được thiết kế bằng hình “hoa cúc”. Mỗi năm, từ cuối tháng 10 đến cuối tháng 11, có một triển lãm trưng bày hoa cúc và búp bê hoa cúc ở phía trước quảng trường sự kiện ở Tòa thị chính thành phố Yoshinogawa và trước ga JR Kamajima.

Kawashima-cho thành phố Yoshinogawa

Biểu tượng “Lâu đài Kawashima” của Kawashima được vẽ ở nắp cống của thị trấn Kawashima. Ngoài Lâu đài Kawashima, ở bên trái phía trên của nắp cống hình ‘Koutsusan’, ‘Ayoyu’, ‘Cầu chìm’ cũng được vẽ.

Minami-cho, huyện Kaifu

Là nắp cống của Minami-cho Huyện Kaifu, nổi tiếng là nơi rùa biển đến đẻ trứng. Được thiết kế bằng hình ảnh con rùa biển. Ở bãi biển Ôhama, hàng năm từ tháng 5 đến tháng 8, rùa biển sẽ đến đây đẻ trứng. Hơn nữa, ở bảo tàng rùa biển “karetta” quý khách cũng có thể thấy rất nhiều rùa biển.



Hơn nữa, ngoài những cái nắp cống trên đường thì còn có rất nhiều cái nắp khác

Waki-machi huyện Mima

Hoa văn của những bức tường của con phố Udatsu cũng được vẽ trên các nắp này.

Không xây nổi Udatsu

「Udatsu」 nghĩa là bức tường phòng hỏa (bức tường ngăn việc cháy lan sang nhà bên cạnh nếu có hỏa hoạn) giữa căn nhà của mình và nhà hàng xóm. Cần phải tốn rất nhiều tiền để xây dựng nên chỉ có nhà giàu mới làm nổi tường Udatsu, vì vậy mọi người hay nói “không xây nổi Udatsu” ám chỉ mình không giàu.

Câu nói này còn mang nghĩa bóng là “không ngóc đầu lên nổi” hay “địa vị xã hội, sinh hoạt cuộc sống mãi không khám phá”.

Thành phố Naruto

Đây là một nắp trụ nước cứu hỏa của Naruto. Một minh họa của một chiếc xe thang được vẽ. Đưa trẻ đường như rất vui mừng.



Các bạn thấy thế nào về các nắp cống của Tokushima? Dù cho các bạn không biết gì về thành phố đó đi chăng nữa thì thông qua các hình vẽ của nắp cống bạn cũng có thể biết về những điều nổi tiếng của thành phố. Những điều thú vị mà ai nhìn cũng thấy vui. Ở đất nước của các bạn có những nắp cống như thế này không? Cho đến bây giờ người chưa nhìn thấy những nắp cống nghệ thuật này thì hôm nay trên đường về và ngày mai lúc đi ra ngoài hãy chú ý con đường đi xem sao. Không chừng sẽ có những phát hiện thú vị.

*Nếu quý vị gõ từ khóa “man ho-ru a-to” quý vị sẽ tìm thấy rất nhiều hình ảnh nắp cống của Nhật Bản với nhiều thiết kế khác nhau. Quý vị hãy tra thử xem

Bạn có muốn đi đến “ngôi làng của bù nhìn” thử không?

Các bạn có biết về “con bù nhìn” không?

Từ ngày xưa, con bù nhìn là con búp bê được làm giống người, thường được đặt ở ruộng, cánh đồng để bảo vệ lúa và cây trồng khỏi bị quạ ăn.

Ở đất nước các bạn có con bù nhìn không? Nếu có thì trông nó ra làm sao?

Ở Tokushima có nơi mà số con bù nhìn nhiều hơn người dân.

Ngôi làng đó thì không có hơn 30 người nhưng trong làng những con bù nhìn giống con người thì có hơn 180 con do đó nơi đây được gọi là “ngôi làng của bù nhìn”.

Những con bù nhìn này đều do 1 người phụ nữ của nơi này làm. Người này đã bắt đầu làm bù nhìn từ 14 năm trước, cho đến bây giờ thì đã làm được hơn 400 con.

Lý do nơi đây lại trở nên nổi tiếng là vì, vào năm 2014 du học sinh người Đức đã đến thăm ngôi làng của bù nhìn và phát tán video. Cho đến bây giờ đã có hơn 500.000 lượt xem, khách du lịch từ khắp nơi trên thế giới đến thăm rất nhiều.

Nếu có cơ hội, bạn hãy đến thử xem sao. Không chừng là bạn sẽ nhầm bù nhìn và người dân địa phương mà chào hỏi đó.

「Thị trấn không có rác」 「thị trấn của lá cây」 Kamikatsu-cho

- Thị trấn Kamikatsu-cho được núi bao quanh. Ruộng bậc thang rất đẹp.
- Nổi tiếng với rêu “yamainudake”

Thị trấn không có rác

Đi từ Tokushima bằng xe oto khoảng 1 tiếng rưỡi vào sâu trong núi sâu sẽ có thị trấn Kamikatsu-cho. Đây là thị trấn có dân số khoảng 1600 người trong đó người cao tuổi chiếm hơn một nửa và đang được thế giới chú ý.

Lý do là vì, nơi đây vào năm 2003 đã có tuyên ngôn “đến năm 2020 thì lượng rác thải ra từ thị trấn là 0” và họ đang phấn đấu thực hiện.

Bây giờ, ở nơi các bạn sống thì rác thải được phân làm mấy loại thế? 3 loại? 5 loại? ở đất nước của các bạn thì như thế nào? đất nước mà không cần phân loại rác chắc cũng không ít nhỉ?

Nhưng, ở Kamikatsu-cho này thì rác thải bị phân thành 13 hạng mục và 45 loại rồi mới thu gom. hơn nữa 80% rác thải đều được tái chế.

Kamikatsu- cho Tuyên ngôn “chất thải zero”

Tương lai để trẻ em chúng ta kế thừa bầu không khí trong lành, nguồn nước sạch, đất đai màu mỡ , thì cho đến năm 2020 , quyết tâm đưa lượng rác thải của Kamikatsu- cho về zero với những tuyên ngôn sau:

- 1) Cố gắng đào tạo con người không làm ô nhiễm trái đất
- 2) Thúc đẩy tái sử dụng và tái chế rác thải và nỗ lực hết sức để loại bỏ việc đốt rác và xử lý chôn lấp vào năm 2020.
- 3) Kết thân với nhiều người trên khắp thế giới để cải thiện môi trường toàn cầu!

Khoảng 2.500 người đang đến thăm các nỗ lực rác thải của thị trấn này mỗi năm vì những nỗ lực đó đang thu hút sự chú ý từ cả nước và từ thế giới.

Thị trấn của lá

Các bạn từ nước ngoài đến Nhật, khi ăn đồ ăn các món Washoku , cảm giác bất ngờ là “ vẻ đẹp của washoku”. Xung quanh đĩa có trang trí lá hoặc hoa theo mùa. Những thứ này gọi là 「tsuma-mono」 .Thị trấn mà từ 30 năm trước những chiếc lá này đã là ngành kinh tế là thị trấn Kamikatsu-cho.

Ở thị trấn khoảng 1.600 người này ,người cao tuổi của khoảng 160 hộ nông dân nhận đơn đặt hàng từ máy vi tính và điện thoại di động, thu hoạch lá và gửi hàng đi.

Bao gồm cả lá “Momiji” và lá “Icho” trong 1 năm hơn 300 loại lá được sử dụng trong các tiệm ăn trên khắp Nhật Bản. Lá của Kamikatsu của Tokushima đã khiến nhiều người cảm thấy bất mắt và đã làm cho hương vị của món ăn Nhật Bản tăng lên.

Thị trấn miền núi xinh đẹp của Tokushima “Kamikatsu-cho” đang tỏa sáng!

「Nhật Bản đất nước của động đất」 Hãy chuẩn bị để bảo toàn tính mạng khi có động đất!




Bây giờ, ở các nơi trên trái đất, nào động đất lớn nào là sóng thần, núi lửa phun trào.

Ở Nhật Bản , sau trận sóng thần lớn “ trận đại địa chấn phía Đông Nhật Bản” năm 2011 đã phá hủy nhiều nhà cửa và thị trấn, thì cũng có vài lần xảy ra động đất, lớn có, nhỏ có. Vì lẽ Nhật Bản là một đất nước có rất nhiều động đất nên được gọi là “ đại quốc động đất”.

Trong vòng 30 năm tới, tỉnh Tokushima được dự đoán với xác suất 70-80% là sẽ xảy ra “trận động đất lớn khổng lồ Nankai “ có cường độ 9 và cường độ địa chấn 7.

Nếu trận động đất khổng lồ xảy ra tại tỉnh Tokushima, 75%nhà cửa sẽ bị phá hủy, các khu vực gần biển sẽ bị sóng thần tràn vào. Những nơi cách xa biển hơn 10 kí-lô-mét cũng không thể yên tâm. Sóng thần cũng có thể tràn vào qua các dòng sông. Ngoài ra cũng có thể núi sẽ sập, đường sá gãy đổ, hỏa hoạn xảy ra.




Động đất xảy ra ở đâu hay xảy ra lúc nào thì không biết trước được. thêm vào đó, không chừng sóng thần có thể đến nơi của bạn. Khi động đất hay sóng thần đến nên chạy hay như thế nào thì hãy cùng nhau tìm hiểu sẵn nhé. Thêm vào đó, hãy chuẩn bị sẵn để đối phó khi động đất xảy ra từ hôm nay nhé

		
Khi chạy ra khỏi tòa nhà mà bị lạc thì hãy chạy về nơi có ký hiệu này.	Địa điểm để sơ tán gấp khi trận động đất xảy ra.	Địa điểm mà những người sơ tán khỏi trận động đất sống cho đến khi hết nguy hiểm.

Kí hiệu của sóng thần



Khi sóng thần xảy ra thì nên chạy đến chỗ cao hơn là chỗ xa

		
Địa điểm có nguy cơ sóng thần sẽ đến.	Địa điểm có vị trí cao, nên chạy đến đây khi có sóng thần.	Tòa nhà cao, nơi nên chạy đến khi có sóng thần.

Chuẩn bị

- ① Dùng kim loại hay cây gỗ để cố định cho đồ nội thất, Ti-vi ..v.v không bị đổ.
- ② Chuẩn bị sẵn thực phẩm, nước, vật dụng sinh hoạt trong 3 ngày , có thể mang theo ngay khi có động đất.
- ③ Chuẩn bị thức ăn, nước uống và các nhu yếu phẩm hàng ngày mà bạn có thể sống trong một tuần sau động đất.
- ④ Hãy điều tra nơi để lánh nạn và tuyến đường đến đó khi xảy ra động đất ,sóng thần.
- ⑤ Hãy ghi nhớ một liên hệ khẩn cấp (thông tin liên lạc của đại sứ quán hoặc gia đình) và số hộ chiếu.

Khi động đất đến

- ① Đầu tiên là hãy bảo vệ đầu và cơ thể. (Trốn dưới bàn, tránh xa cửa sổ, đèn điện, đồ nội thất..v.v.)
- ② Nếu bạn ở trong một căn hộ, chung cư, tòa nhà, thì đừng sử dụng thang máy mà hãy đi xuống bằng cầu thang.
- ③ Nếu đang ở trong thang máy, thì hãy ấn nút của tất cả các tầng, sau đó chạy ra khỏi thang máy ở tầng dừng lại đầu tiên.
- ④ Những người ở gần biển và sông có thể gặp sóng thần. Ngay cả sóng có chiều cao tới đầu gối đi chẳng nữa con người cũng sẽ bị cuốn trôi đi.

Trong thành phố Tokushima thì sẽ có sóng thần khoảng 5m, khu vực phía nam của tỉnh Tokushima sẽ có sóng thần khoảng 10m đến.Đặc biệt là những người ở gần biển thì phải nhanh chóng di tản lên núi hoặc tầng thứ 3 trở lên của tòa nhà cao.

- ⑤ Đừng chạy lánh nạn bằng ô tô. Vì không thể di chuyển chút nào khi kẹt xe xảy ra.
- ⑥ Khi bạn rời khỏi nhà trong lúc mất điện, đừng quên ngắt cầu dao vì khi có điện trở lại thì có thể xảy ra hỏa hoạn.



Để biết chi tiết, "Cẩm nang thiên tai" nằm ở bên trái trang chủ TOPIA. Nhất định hãy đọc nhé.

Linh vật / đại sứ thương hiệu / biểu tượng của Tokushima

Quý vị có biết về linh vật / đại sứ thương hiệu không? Hiện nay trên khắp nước Nhật có rất nhiều hình tượng được nhân vật hóa để quảng bá cho mỗi địa phương. Có những biểu tượng đã được biết đến khá nhiều như “Kumamon” của tỉnh Kumamoto, “Barysan” của tỉnh Ehime. Tại đây, Tokushima cũng có nhiều biểu tượng <đại sứ thương hiệu>, chúng tôi sẽ giới thiệu cùng quý vị ngay sau đây. Mỗi nhân vật có những điểm đặc trưng của từng địa phương như địa danh, đặc sản của địa phương đó. Vì vậy khi nhìn / xem đại sứ thương hiệu, quý vị có thể ít nhiều hiểu về địa phương đó. Song song với việc đi qua các biểu tượng, chúng tôi sẽ giới thiệu thông tin về các địa phương để quý vị cùng nhau tìm hiểu.

TOPPY <chữ Hán: “đa bảo”>

Hiệp Hội Giao Lưu Quốc Tế Tỉnh Tokushima <TOPIA> được thành lập năm 1990. Nhân dịp kỷ niệm mười năm thành lập hội, hình tượng biểu trưng của TOPIA là ‘TOPPY’ đã được xây dựng vào năm 2000. TOPPY được vẽ nên từ nhiều địa danh và đặc sản của Tokushima. TOPPY cũng được gắn một ăng-ten to nhằm thu thập thông tin trên toàn thế giới và cầu mong cho trái đất chúng ta sống trong hòa bình.

SUDACHI-KUN

Hình tượng biểu trưng của tỉnh Tokushima là Sudachi-kun. Vào năm 1993 trong dịp Đại Hội Thể Thao Toàn Quốc – Miền Đông Shikoku, Sudachi-kun đã hoạt động như là một biểu tượng của tỉnh Tokushima. Hiện nay Sudachi-kun cũng thường đi khắp tỉnh Tokushima và cả nước để quảng bá về Tokushima. Hơn thế, ước mơ của Sudachi-kun là làm sao cho tỉnh Tokushima được thế giới biết đến. Sudachi-kun rất thích làm cho mọi người cảm thấy vui, khỏe nên luôn mang theo nét quyến rũ của khuôn mặt tươi cười, dễ thương, đó chính là vitamin, nguồn gốc của sự vui khỏe.

TOKUSHI

Năm 2012 linh vật rạng rỡ, khỏe mạnh <Tokushi>, hình tượng con cá đã được cho ra đời.

Biểu tượng Tokushi quảng bá những điều tốt đẹp của thành phố Tokushima đến với cả nước và tích cực hỗ trợ xây dựng thành phố năng động, vui tươi. Tokushi là một cô bé thích múa điệu Awa và thích trò chuyện với mọi người.

UZUSHIO-KUN, UZUHIME-CHAN

Nhân dịp kỷ niệm 50 năm ngày thành lập thành phố, năm 1996 Uzushio-kun đã được cho ra mắt. Sau đó, vào năm 2012 Uzuhime-chan đã ra đời để tạo nên cặp đôi với Uzushio-kun. Cả hai đã hoạt động ở nhiều nơi nhằm làm cho thành phố Naruto ngày thêm nhiều sức sống.

KOMAPON

Komatsu-shima là quê hương của chó gấu trúc . Kin-cho, nhân vật trong chuyện cổ tích “Trận hỗn chiến của chó gấu trúc Awa”. Đồng thời tương truyền rằng có một samurai mạnh mẽ, nổi tiếng (ngài Minamoto-no-yoshitsune) trên đường đi chiến đấu đã ghé đến Komatsu-shima. Chó gấu trúc Kin-cho và ngài samurai (ngài Minamoto-no-yoshitsune) đã được hình tượng hóa để tạo nên biểu tượng chó gấu trúc Kin-cho mạnh mẽ, dễ thương <Komapon>. Nhân vật biểu tượng này luôn phấn đấu quảng bá những điều tốt đẹp và những món ăn ngon của Komatsu-shima đến công chúng.

ANA-NAN

Anan là thành phố nằm ở phía cực đông nhất của Shikoku. Vì vậy Anan là nơi đầu tiên của Shikoku có thể nhìn thấy mặt trời mọc khi ngày mới bắt đầu. Ana-nan được tạo ra từ ý tưởng hoa hướng dương nở rộ ở “thành phố ánh nắng Anan”, hoa và cái bờm ánh nắng trông như một con sư tử đầy kỳ bí.

Ana-nan khỏe mạnh, đang lớn dần lên vì thường xuyên được tắm dội bởi thật nhiều ánh nắng thiên nhiên và nguồn sáng mới từ năng lượng do con người tạo ra.

YOPPY, PIPPY

Tại thành phố Yoshinogawa, bờ nam khu vực trung lưu của dòng sông Yoshino – con sông được mệnh danh là “Tam Lang Shikoku”, có những thứ nổi tiếng như hoa On-tsutsusi (một loại hoa đỗ quyên) tuyệt đẹp, con đom đóm, bắp trái <cô gái ngọt ngào> hay rượu mận của thị trấn Misato. Năm 2003 hai linh vật thần nước từ dòng sông Yoshino đã ra đời và lần đầu tiên ra mắt hoạt động tại khu vui chơi Yoshinogawa. Hiện nay hai nhân vật đang phối hợp tích cực quảng bá các địa điểm du lịch, các đặc sản của thành phố Yoshinogawa ra công chúng.

Chozokko (CÔ GÁI MŨM MỈM)

Biểu tượng được cho ra đời để quảng bá loại cam cho-zo (cam mọng nước) của thị trấn Katsu-ura là hình tượng cô bé 13 tuổi. Giống như nhân vật khả ái trong phim hoạt hình với cặp mắt to phồng cùng màu sắc của các loại vitamin (màu của rau củ, trái cây) một cách hài hòa là điểm thu hút của hình tượng này.

Fujikko-chan

Linh vật <Fujikko-chan> được sinh ra từ hình ảnh hoa Fuji (hoa tử đằng) của thị trấn Ishi-i. Mái tóc trông giống như hoa fuji và đôi cánh có thể bay đến bất cứ nơi nào chính là điểm đặc trưng của Fujikko-chan. Với tư cách là một đại biểu của thị trấn Ishi-i được mọi người cảm thấy gần gũi và yêu mến, Fujikko-chan đang tích cực hoạt động ở nhiều nơi.

Yuzu-bachan (Bà Yuzu)

Cái đầu bằng gỗ là hình trái yuzu nổi tiếng (yuzu là một loại trái thuộc họ cam quýt) Bà Yuzu là một bà tiên được sinh ra từ mùi hương yuzu khi con người hái trái yuzu. Bà tiên yuzu hoạt động tại các làng miền núi thuộc dãy núi Shikoku. Bà đang làm việc hăng say trên những cánh đồng trồng yuzu, miêng lúc nào cũng nói “ikeru, ikeru” (không sao đâu, không sao đâu.)

FURU-RUN

Furu-run là linh vật của Kaifugawa, được tạo ra từ hình ảnh các cuộc chạy bộ đường dài (ma-ra-tông) có tên ‘furu marason’ của Kaifugawa (‘furu’ còn có nghĩa là ‘luồng gió’ hay ‘thanh lịch’) . Furu-run được cho ra đời ngày 22 tháng 2 năm 2009(đại hội ma-ra-tông lần thứ nhất). Ước mơ của Furu-run là làm sao để mọi người trên cả nước biết về ‘furu marason’ của thị trấn Kaiyo và Kaifugawa. Furu-run là một hình tượng ngây thơ, chất phác (như trẻ con trong sáng, tươi vui) .

MATSUSHIGE KAKARI-CHO (THỦ TRƯỞNG MATSUSHIGE)

Từ trên mặt trăng, trong lúc đang ngắm nhìn hạ giới (trái đất) , chú thỏ cung trăng đã say đắm thị trấn Matsushige. Vì quá yêu mến Matsushige nên chú thỏ đã mang theo trên người mình rất nhiều đặc sản của địa phương. Với tính cách nhàn nhã, thành thoi, phương tiện di chuyển yêu thích của chú thỏ cuối cùng vẫn là “máy bay” (hay “tàu bay”) . Sở thích của chú thỏ là câu cá hay sử dụng sản phẩm đặc trưng của Matsushige để nấu ăn.

AI-NO-SUKE

Đó là một người thành thoi, tốt bụng với đôi mắt to dễ mến. Là người đứng đầu cửa hàng “Ai” (cửa hàng trướng) , Ai-no-suke thoải mái bắt chuyện với tất cả mọi người. Với tính cách lịch thiệp, hai tay ông luôn chấp ra phía trước, trịnh trọng chào hỏi mọi người. Ông cũng rất thích nắm tay trẻ con, oánh-tù-tì, chơi đùa cùng các bé. Công việc của ông là truyền bá việc nhuộm chàm đặc sản, hay sự hấp dẫn của các sản vật đặc biệt của thị trấn Aizumi đến với công chúng.

Kaki-ji (Ông Kaki)

Ông Kaki được sinh ra và lớn lên tại Oyama, thị trấn Kami-ita, nơi nổi tiếng trồng được những trái hồng to và ngọt. Ông sống và chăm sóc những cánh đồng hồng một cách thảnh thơi nhưng ông cũng đã đảm nhiệm việc quảng bá thị trấn Kami-ita, quê hương ông, đến với cả nước. Mặc dù đã là “ông cụ”, ông vẫn đang làm việc, hoạt động tích cực, khỏe mạnh.

“RAKUGO” BẰNG TIẾNG NHẬT ĐƠN GIẢN

“Rakugo” là gì?

“Rakugo” được hình thành vào khoảng 400 năm trước (thời đại Edo), là một trong những nghệ thuật truyền thống của Nhật Bản.

Mỗi người hóa thân vào nhiều nhân vật khác nhau, vừa nói vừa kể hay thuật lại những câu chuyện thú vị.

Cầm quạt hay khăn trên tay, người kể sẽ thực hiện nhiều động tác hay thể hiện cảm xúc của nhân vật trong chuyện.

Toki Udon

(Nhân vật tham gia: chủ tiệm Udon, vị khách, người đàn ông)

Một buổi tối nọ có một người đàn ông vào quán mì Udon gọi một bát mì Udon ăn. Vị khách này khen không ngớt lời rằng Udon vừa có mùi thơm hấp dẫn vừa có vị rất ngon. Sau đó quán Udon náo nhiệt hẳn lên. Udon có giá là 16 xu. Vị khách ăn xong lấy tiền trả từng xu cho chủ quán 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8...và vị khách hỏi chủ quán mấy giờ. Chủ quán trả lời là 9. Vị khách tiếp tục đếm tiền trả 10, 11, 12...Cuối cùng vị khách chỉ phải trả 15 xu cho một bát mì Udon.

Một người đàn ông khác nhìn thấy vậy liền nghĩ mình cũng thử làm giống thế xem sao. Ngày hôm sau, anh ta tìm thấy một quán mì Udon liền vào ăn. Nhưng Udon của quán này dở quá khiến anh ta chẳng thể nào khen được. Giá của Udon vẫn là 16 xu. Anh ta ăn xong cũng lấy tiền trả từng xu cho chủ quán 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8...và cũng hỏi chủ quán mấy giờ. Chủ quán trả lời là 5. Anh ta lại tiếp tục đếm tiền trả 6, 7, 8...Cuối cùng anh ta phải trả đến những 19 xu cho một bát mì Udon.

Chi-ri-tô-tê-chin

[Nhân vật tham gia] Danna:Gia chủ , Ume san:Cô Mai hàng xóm, Take san: Cô Trúc hàng xóm

Một ngày nọ, cô Mai đến thăm nhà gia chủ. Gia chủ mang thức ăn ra tiếp đãi cô Mai. Cô Mai ăn xong liền nói “Tôi đã no rồi, thật là hạnh phúc quá”. Cô Mai lúc nào cũng khen ngợi “Ngon quá, ngon quá” và thưởng thức món ăn khi được gia chủ tiếp đãi.

Khi cô Trúc đến thăm nhà, gia chủ cũng mang thức ăn ra tiếp đãi. Thế nhưng cô Trúc lúc nào cũng nói toàn những lời không vui, nào là “Không ngon”, nào là “Món này tôi đã từng ăn rồi”. Gia chủ đã đem chuyện cô Trúc kể cho cô Mai nghe.

Một ngày kia, nhà gia chủ có hộp tàu hủ để lâu ngày đã bị vỡ vụn, hôi thối. Tàu hủ đã biến thành màu vàng, có cả nấm mốc xanh đỏ. Gia chủ đã cho nước tương, mù tạt vào tàu hủ hư và trộn đều lên, sau đó cho vào hộp, dán kín bằng mảnh giấy với dòng chữ “Chi-ri-tô-tê-chin, đặc sản Nagasaki”.

Cô Mai đã gọi cô Trúc đến nhà gia chủ. Gia chủ hỏi cô Trúc “Cô biết Đặc sản Nagasaki Chi-ri-tô-tê-chin không? Cô ăn thử không?” Cô Trúc trả lời rằng “Đương nhiên là tôi biết, tôi thích món đó lắm, tôi muốn ăn”.

“Chi-ri-tô-tê-chin” vừa hôi vừa khó ăn nhưng cô Trúc đã cố ăn hết. Gia chủ hỏi cô Trúc “Món Chi-ri-tô-tê-chin mùi vị thế nào?” Cô Trúc trả lời “Ừ...ừm, mùi vị của tàu hủ giống như đã bị hỏng rồi.”.

CHUYỆN CỔ TÍCH TOKUSHIMA

「TRẬN HỒN CHIẾN CỦA CHÓ GẤU TRÚC AWA」 THÀNH PHỐ KOMATSUSHIMA

Cách đây khoảng 150 năm, khi Tokushima còn được gọi là Vương Quốc Awa, tại thị trấn Higaino (thành phố Komatsu shima, tỉnh Tokushima) có một cửa hàng rất lớn tên là Yamatoya. Cửa hàng chuyên bán các loại vải được nhuộm và in hoa văn từ cây chàm (tên của một loại cỏ).

Một hôm khi chủ cửa hàng, ông Mô-ê-môn, đang tản bộ thì thấy bọn trẻ đang chọc phá một con chó gấu trúc trong một hốc cây lớn.

“Các cháu đang làm gì đấy? Tội nghiệp con vật quá, thả cho nó đi đi thôi”. Ông chủ lên tiếng với bọn trẻ, thế là con chó gấu trúc được buông tha.

Con chó gấu trúc được ông chủ cứu giúp có tên là Kin-cho. Nó quyết định ở lại cửa hiệu Yamatoya của ông chủ tốt bụng. Từ đó Kin-cho trở thành vị thần hộ mệnh của cửa hiệu và đã thu hút được rất nhiều khách hàng.

Đêm nọ, khi Kin-cho đang ngủ thì có một vị Thần hiện ra và nói “Nếu muốn trở nên mạnh mẽ hơn nữa thì hãy đi xa một chuyến”. Thế nhưng ông Mô-ê-môn, chủ cửa hiệu Yamatoya thì cầu xin “Nếu thần hộ mệnh rời xa thì chúng tôi sẽ gặp khó khăn, xin đừng đi xa”, nhưng Kin-cho hứa sẽ quay trở về và tiếp tục làm thần hộ mệnh. Sau khi hứa hẹn Kin-cho lên đường ra đi.

Sau đó, Kin-cho cùng với Ô-taka (tên của một con chó gấu trúc khác) cùng nhau đi đến lâu đài Ana-gan-non, núi Tsuda (thành phố Tokushima) nơi Roku-ê-môn, con chó gấu trúc mạnh nhất Shikoku đang sống. Sau khi nghe Kin-cho và Ô-taka hầu chuyện, Roku-ê-môn đã vui vẻ chào đón và nói “Lặn lội từ Komatsu Shima đến đây à. Cố gắng lên nhé”. Hai con chó gấu trúc miệt mài học hành và ngày càng trở nên mạnh hơn.

Roku-ê-môn có cô con gái được gọi là Công Chúa Kanoko. Công Chúa Kanoko rất quý mến Kin-cho. Roku-ê-môn cũng cảm thấy thích một Kin-cho mạnh mẽ nên đã ngỏ lời gả con gái cho và sẽ coi Kin-cho như con trai của mình. Thế nhưng Kin-cho đã kính cẩn từ chối “Rất cảm ơn thịnh ý của Ngài nhưng vì tôi đã hứa sẽ trở về Komatsu Shima để tiếp tục làm thần hộ mệnh cho cửa hiệu Yamatoya nên tôi không thể ở lại đây để làm con trai của Ngài. Thành thật cáo lỗi”.

Roku-ê-môn lại nghĩ 「Đề nghị của mình quá tốt đẹp mà hắn từ chối, liệu có phải hắn dự tính trở về Komatsu Shima tập hợp đồng bọn và quay lại tấn công lâu đài Ana-gan-non hay không.」 Nghĩ như thế nên Roku-ê-môn đã ra lệnh cho đồng bọn

của mình “Bắt lấy Kin-cho”.

Kin-cho và Ô-taka chạy thực mạng về hướng Komatsu Shima, thoát được đến dòng sông Katsu-ura thì không còn đường thoát, trước mặt là dòng sông chắn ngang. Ngay lúc đó Ô-taka hô lớn “Xin lỗi nhé, hãy cố gắng chạy thoát nhé”, vừa nói Ô-taka vừa đẩy mạnh Kin-cho xuống dòng sông Katsu-ura.

Để Kin-cho có thể bơi thoát thân càng xa càng tốt, Ô-taka một mình chiến đấu hết sức mình nhưng Ô-taka đã bị giết. Nhờ Ô-taka, Kin-cho cuối cùng bằng mọi cách đã thoát về đến Komatsu Shima.

Khi nghe Kin-cho đột nhiên trở về, kể lại đầu đuôi câu chuyện, con trai và anh em của Ô-taka đã cùng một lực lượng hùng hậu chó gấu trúc tập hợp lại để đi giết kẻ thù.

Trong lúc đó, tại lâu đài Ana-gan-non Công Chúa Kanoko đã nhiều lần vừa khóc vừa cầu xin cha là Roku-ê-môn “Cùng là đồng loại chó gấu trúc thì không nên chém giết lẫn nhau. Ở Tsuda cũng như Komatsu Shima sẽ có không biết bao nhiêu chó gấu trúc mất mạng. Làm ơn hãy dừng lại”.

Thế nhưng Roku-ê-môn đã không nghe lời con gái mình. Thấy cảnh cha và người mình yêu mến chém giết lẫn nhau Công Chúa Kanoko quá buồn bã nên đã gieo mình xuống từ vách đá cao tự vẫn. Roku-ê-môn cho rằng “Con gái tôi chết đi là tại vì Kin-cho. Hãy giết Kin-cho ngay” vì thế đã tập hợp toàn bộ chó gấu trúc ở sông Katsu-ura.

Thế là cuộc chiến được gọi là “Trận hỗn chiến của chó gấu trúc Awa” bắt đầu. Ở Tsuda và Komatsu Shima mỗi bên đều tập hợp 600 chó gấu trúc. Trận chiến kéo dài ba ngày. Sau cùng Kin-cho đã đuổi theo Roku-ê-môn đến tận vách đá cao của Tsuda, nơi Công Chúa Kanoko tự sát. Tại đây Kin-cho và Roku-ê-môn quyết chiến với nhau, Kin-cho chiến thắng và Roku-ê-môn đã ngã xuống.

Kin-cho thân thể đầy thương tích đã bằng mọi cách về đến Komatsu Shima và đi đến Yamatoya của ông Mô-ê-môn. Kin-cho đã cảm tạ ơn nghĩa trước nay của ông chủ, tại đây Kin-cho đã kiệt sức và qua đời.

Ông Mô-ê-môn rất ấn tượng về cách sống cao đẹp của Kin-cho nên đã đặt tên cho là “Kin-cho Thần Daimyo Thứ Nhất”. Ông xây đền, dâng cúng thức ăn, lễ vật để thờ cúng Kin-cho nay đã trở thành một vị thần.

Hiện nay cũng vẫn có rất nhiều người đến viếng thăm, chấp tay vái lạy tại Đền thờ kin-cho ngay chân núi Hinomine.

「ĐỊA TẠNG BÁO MỘNG」 THỊ TRẤN KITAJIMA, QUẬN ITANO

Chuyện kể về ngày xưa của thôn Minami Koda (thị trấn Kitajima, quận Itano). Mọi người sống tại thôn đều làm ruộng trồng lúa. Thế nhưng gần đó là dòng sông Yoshino đang chảy, con sông lớn nhất Shikoku, mỗi khi mưa lớn đều bị tràn bờ gây khốn khổ cho người dân. Dân trong thôn đã xây một bờ đê rất cao (bờ đê là tường cao bao xung quanh bờ sông được làm bằng đất). Sau đó mọi người đã đặt tượng Ngài Địa Tạng trên bờ đê và khấn nguyện “Làm ơn phù hộ giữ cho bờ đê đừng bị vỡ dù cho có mưa lớn” (Địa Tạng là vị thần phù hộ, giúp đỡ những người gặp khó khăn).

Một ngày nọ, từ chạng vạng tối trời bắt đầu mưa. Dân trong thôn nghĩ “mưa cỡ thế này thì không đáng lo” nên nghỉ ngơi và ngủ say sưa sau một ngày làm ruộng vất vả. Thế nhưng đến giữa khuya mưa bắt đầu nặng hạt và trở nên mưa lớn. Ngay khi đó từ đâu đó có một giọng nói rất lớn vang lên “Bờ đê sẽ vỡ đấy, hãy nhanh chân lánh đi”. Giọng nói lớn đến nỗi mọi người giật mình thức giấc đứng phắt dậy. Nhìn ra con sông mọi người thấy mực nước đã dâng cao gần bằng bờ đê. “Thế này thì nguy quá, hãy nhanh chóng lánh đi thôi”, dân trong thôn hoảng hốt chạy lánh nạn. Bằng cách nào đó mọi người trong thôn đã đến được Chùa Koren ở nơi cao ráo, khi đó giọng nói vang dội lại cất lên “Bờ đê đã vỡ rồi đấy”.

Nước từ dòng sông Yoshino ào ạt tràn tới cuốn phăng theo toàn bộ lúa đã trở bông trên đồng và rất nhiều nhà cửa. Ngay lúc đó, một thanh niên đã bơi đến bờ đê, cõng tượng Ngài Địa Tạng trên lưng và quay trở lại chùa. Mọi người ngạc nhiên vì thanh niên cõng bức tượng đá to gần bằng bản thân mình và bơi trong dòng nước chảy xiết đến chùa. Hòa thượng chùa Koren đã hỏi thanh niên đó: “Vì sao mang Ngài Địa Tạng đến đây?” Thanh niên đó trả lời “Ngài Địa Tạng đã đến và báo mộng cho chúng ta về việc bờ đê vỡ. Nếu cứ để Ngài ở đó, Ngài Địa Tạng sẽ bị cuốn trôi đi mất”.

Vị hòa thượng nghĩ ngợi chốc lát và hỏi dân trong thôn: “Ai đã nói ‘bờ đê sẽ vỡ’ sau đó là ‘bờ đê đã vỡ’?”. Thế nhưng thực tế là đã không có ai nói những câu đó.

“Thế kia à, vậy đúng là Ngài Địa Tạng rồi, Ngài đã báo cho chúng ta đấy”. Dân trong thôn cảm tạ Ngài Địa Tạng từ tận thâm

tâm mình. Đến tận ngày nay, bức tượng trên vẫn được gọi là “Địa Tạng báo mộng”, được đặt trang trọng trong vườn của chùa Koren. Hằng năm, lễ hội được tổ chức khi mùa hè đến.

「QUAN ÂM NHẢ GẠO」 SUKETO HONCHO, THÀNH PHỐ TOKUSHIMA

Chuyện kể về thời kỳ Tokushima vẫn còn được gọi là “Vương Quốc Awa”. Có một ngôi chùa tên là chùa Guzei ở tại Suketo. Chùa rất nghèo, hàng rào bao quanh chùa đã bị gãy nhiều chỗ. Nhà sư của ngôi chùa này suốt ngày chỉ có tụng kinh niệm phật (cầu nguyện). Thế nhưng nhà sư quá chú tâm tụng kinh niệm phật mà không làm gì khác nên chùa càng ngày càng nghèo hơn.

Một ngày nọ, các chú tiểu đã nói với nhà sư (chú tiểu là các trẻ em đến học đạo để sau này trở thành nhà sư): “Thưa thầy, sáng mai sẽ hết gạo, chúng ta phải làm sao đây?”

“Hết gạo thì ăn khoai, nếu khoai cũng hết thì không cần ăn gì cả, chỉ tụng kinh niệm phật thôi”, nhà sư trả lời. Nghe như thế, không còn cách nào khác các chú tiểu đành mang hết thảy những đồ vật có giá trị của chùa đi bán và mua gạo về.

Cũng vì lẽ đó, rất nhiều chú tiểu đã bỏ chùa ra đi, chỉ còn lại một chú vốn có tính tham lam ở lại chùa. Chú nói với nhà sư “bây giờ chỉ còn lại mỗi Phật Quan Âm cái tượng mà mỗi ngày sư thầy thờ cúng (cầu nguyện), mang tượng đó đi bán nhé”. Nhà sư nổi giận “Cái gì, ăn nói phạm thượng thế mà cũng nói được à. Đừng nghĩ ngợi gì nhiều, cứ cầu nguyện thì sẽ thấy con đường mình cần đi. Chú cũng phải cúng bái đi”.

Chú tiểu nghĩ “Thật ngốc nghếch, nếu chỉ cúng bái mà có gạo để ăn thì chẳng còn ai làm lụng cực nhọc”. Vừa nghĩ thầm trong bụng như thế chú vừa tụng kinh.

“Nam Mô A Di Đà Phật, Nam Mô A Di Đà Phật...” Không lâu sau, khi chú đang cúng bái thì nghe những tiếng động lạ. Sà, sà, sà, đập, đập, đập... Ngẩng nhìn lên chú thấy tượng Phật Quan Âm trước mắt mình đang nhả gạo ra. Những hạt gạo sáng lóng lánh, dư phần cho hai người ăn. Câu chuyện đã được đồn đãi ra ngoài, rất nhiều người đã đến để xem. Tiền cúng dường (tiền do mọi người dâng cúng khi đến viếng chùa) tăng lên nên chùa cũng phần nào đỡ nghèo túng. Một mặt, chú tiểu tham lam nghĩ bụng nếu làm cho tượng Phật Quan Âm nhả nhiều gạo hơn thì sẽ càng kiếm được nhiều tiền hơn.

Ngày nọ, khi tượng Quan Âm bắt đầu nhả gạo giống như mọi khi thì chú tiểu dứt ngay cây gập than đã được đốt nóng đồ rục vào miệng tượng để làm cho miệng tượng lớn ra thêm (cây gập than là một dạng đũa / cây gập được làm bằng kim loại dùng để gập than đang cháy). Chú nói “Nào, mở miệng lớn ra hơn, nhả gạo ra nhiều hơn nào”.

Thế nhưng ngay sau đó tượng Quan Âm ngừng nhả gạo ra, và chùa Guzei trở lại nguyên trạng nghèo nàn khi xưa. Về phần chú tiểu, có người bảo rằng chú đã bị đuổi ra khỏi chùa, cũng có người nói chú bị Quan Âm trừng phạt nên đã chết. Không ai biết chính xác chú tiểu đã trở nên như thế nào.

「LỜI DẠY CỦA TIÊN NHÂN」 THÔN NISHI-IYA-YAMA, THÀNH PHỐ MIYOSHI

* Tiên nhân là người rời xa thế giới trần tục, sống trên núi, có năng lực đặc biệt là không bao giờ già, không bao giờ chết.

Ngày xưa ngày xưa có một người mẹ mù lòa sống cùng người con trai hiếu thảo. Người con trai hằng ngày đan giày cỏ để bán, kiếm tiền mua những thứ mẹ thích cho mẹ (giày cỏ được làm bằng rơm bện tết lại). Người mẹ thường hay nghĩ mình thật có lỗi với con. Một đêm nọ, một vị thần đã đến trong giấc mơ và nói với người con “Ồ trên núi hiện có một tiên nhân. Hãy đi đến đó và cầu xin chữa lành mắt cho mẹ.” Người con vui mừng và nghĩ thật là may vì mình đã cầu nguyện thần thánh mỗi ngày.

Rạng sáng ngày hôm sau, người con mang theo thật nhiều cơm vắt và rời khỏi nhà. Vừa đi được vài bước, người con đã gặp vị trưởng lão (người lớn tuổi giàu nhất trong thôn)

“Mới sáng sớm tinh mơ, anh đi đâu thế?” trưởng lão cất giọng hỏi.

“Con đi lên trên núi để cầu xin tiên nhân chữa lành mắt cho mẹ” người con trả lời.

“Ồ, thế thì tốt quá. Ta có đứa con gái lâm bệnh, chỉ nằm trên giường bệnh đã ba năm nay. Nhân tiện anh có thể hỏi tiên nhân dùm ta nên làm thế nào, được không?” trưởng lão ướm lời.

“Dạ được” người con trả lời và hướng về phía núi tiếp tục lên đường.

Tối đến anh được cho ngủ nhờ ở nhà một người nông dân. Chủ nhà hỏi anh đang trên đường đi đâu. Khi anh trả lời đang đi lên núi để gặp tiên nhân thì chủ nhà liền nhờ vả:

“May quá, nhà tôi có ba cây cam đã ba năm rồi không hề ra quả. Anh có thể giúp tôi hỏi tiên nhân xem nên làm thế nào không?”

Anh nhận lời hỏi giúp. Sáng sớm hôm sau anh lại quày quả lên đường.

Anh đã vượt qua bao nhiêu ngọn núi, bao nhiêu thung lũng, nay anh đang ở chân một vách đá cao vút, nhìn không thấy chỗ nào để leo lên. Khi anh đang nhìn lên vách đá cheo leo thì có một con rắn to bò đến và hỏi anh muốn đi đâu. Anh bảo rằng đang trên đường đi gặp tiên nhân, con rắn nói:

“May quá. Để tôi giúp anh lên đỉnh vách đá. Tôi đã tu hành cả ngàn năm ở sông, ở núi, vậy mà không cách gì tôi có thể lên trời được. Anh có thể hỏi tiên nhân dùm tôi phải làm sao?”

Anh hứa sẽ hỏi giúp, thế là con rắn thả cái đuôi dài ngoằng xuống chân vách đá. Khi anh nắm lấy đuôi rắn thì đột nhiên anh được nhấc bổng lên trên vách đá. Anh lại vượt qua bao nhiêu ngọn núi, bao nhiêu thung lũng, cuối cùng anh đã đến được nhà của tiên nhân. “Tôi là người sống dưới chân núi, do có việc mong được dạy bảo nên đã đến đây. Làm ơn hãy chỉ dạy cho” anh mở lời nhờ cậy. “Chỉ bảo cho cũng được nhưng chỉ ba điều thôi nhé” tiên nhân nói. Anh nghĩ ngợi “mình cần hỏi đến bốn điều, nhưng thôi, cứ hỏi những điều mọi người nhờ vả mình trước đã”.

Tiên nhân dạy rằng đối với cô con gái trưởng lão, hãy cho cô gặp một thanh niên và cưới gả (làm chồng) cho cô thì cô sẽ khỏi bệnh ngay. Đối với mấy cây cam của nhà nông nọ, phía dưới rễ cây có chôn ‘thùng ngàn lượng’ (thùng đựng rất nhiều tiền vàng trong đó) nếu đào các thùng tiền lên, chất độc của vàng không còn nữa thì cây sẽ ra quả. Đối với con rắn to, trong đầu rắn có một quả cầu đá, nếu lấy quả cầu ra thì điều mong ước sẽ đạt thành. Anh lạy tạ tiên nhân nhiều lần và lập tức xuống núi.

Trước tiên khi anh truyền lại lời chỉ dạy của tiên nhân cho rắn thì rắn đã nhờ anh lấy cây dao ở đuôi mình ra, cắt lấy khối u trên đầu mình. Người con trai đã làm theo, cắt vỡ khối u trên đầu rắn, sau đó thò tay vào trong khối u, quả nhiên trong đó có một quả cầu màu trắng. Con rắn đã đưa anh xuống vách đá và tặng anh cây dao cùng quả cầu trắng. Từ trên trời mây đen sà xuống, con rắn to đã lên những cụm mây và bò lên trời.

Tiếp theo anh đã nói với người nông dân về việc nên đào rễ của mấy cây cam. Ngày hôm sau, khi mọi người đào rễ của ba cây cam thì ba ‘thùng ngàn lượng’ đã hiện ra. Người nông dân vô cùng vui sướng, biếu người con trai một thùng tiền vàng.

Sau cùng anh đi đến nhà của vị trưởng lão trong thôn. Anh truyền lời lại rằng “Đối với bệnh tình của tiểu thư, nếu gả tiểu thư cho người thanh niên mà lần đầu tiên tiểu thư gặp mặt thì bệnh tình sẽ khỏi.” Ngay khi đó, người con gái suốt bấy lâu nay nằm trên giường bệnh ở phòng bên cạnh mở cửa bước ra và thỉch:

“Anh đã vì chuyện của tôi mà cực nhọc, thật cảm ơn anh quá”. Khi nói những lời đó cô đã ngược nhìn và đối diện với người con trai. Thật đáng kinh ngạc, ngay lập tức cô trông rất khỏe mạnh có thể đi lại được.

Trưởng lão chứng kiến tình cảnh đó vô cùng sung sướng và nói: “Người thanh niên mà con gái ta lần đầu gặp mặt chính là anh đó. Con ta cũng đã khỏi bệnh, anh hãy làm con rể ta nhé.”

Thế nhưng người con trai trả lời “Nếu con chấp nhận như thế thì con có lỗi với người mẹ mù lòa của con lắm. Con vẫn chưa thể làm cho mong ước của mẹ con trở thành hiện thực”, và anh cáo từ ra về.

“Mẹ ơi, khi con đang trên đường đi lên núi thì đã có ba người nhờ con hỏi tiên nhân chỉ dạy, vì vậy con đã không thể hỏi tiên nhân về cặp mắt của mẹ, con xin lỗi mẹ. Con sẽ đi lên núi để hỏi tiên nhân một lần nữa, mẹ ráng chờ con thêm một thời gian nhé”, người con nói và xin lỗi người mẹ.

Sau đó, anh vừa kể cho mẹ nghe về chuyến đi vừa rồi, vừa cho mẹ sờ soạng tặng vật của con rắn to “con rắn to đã cho con những thứ này, đây là quả cầu bằng đá, còn đây là con dao đó mẹ”. Thật ngạc nhiên, khi người mẹ vừa sờ vào các tặng vật thì cặp mắt của bà mở ra sáng ngời. Hai mẹ con ôm chầm lấy nhau sung sướng. Sau đó người con trai kết hôn với con gái trưởng lão, mọi người sống vui vẻ, hạnh phúc bên nhau trọn đời.

International Division
Commerce, Industry, Labour and Tourism Department
Tokushima Prefectural Government



徳島県商工労働観光部国際課

〒770-8570 徳島市万代町1-1
1-1, Bandai-cho Tokushima City, 770-8570 Japan

TOKUSHIMA PREFECTURAL INTERNATIONAL EXCHANGE ASSOCIATION

企画製作：公益財団法人

徳島県国際交流協会



〒770-0831 徳島市寺島本町西1丁目61
1-61, Terashima honcho Nishi, Tokushima City, 770-0831 Japan

<http://www.topia.ne.jp/> TEL (088) 656-3303
E-mail: topia@topia.ne.jp FAX (088) 652-0616

このテキストは、文化庁 平成30年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
により作成したものです。 平成31年3月作成

なお、このテキストの情報は平成31年1月現在のものです。
情報は変わる場合がありますので、御了承ください。